

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.152

2006年1月

第13回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催



目次

●ニュース	
第13回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催	2
名古屋大学 International Advisory Board を設置	4
平野総長がタイ王国を訪問ー全学同窓会タイ国支部が設立されるー	5
高等研究院フォーラム2005を開催	6
東海地区信用金庫協会と「産学連携に関する協定書」を締結	7
第28回名古屋大学シニアの会を開催	7
私立大学関係職員との意見交換会～OB 職員（総務系）～を開催	8
個人情報保護に関する教育研修会を開催	8
永年勤続者表彰式を開催	9
セクシュアル・ハラスメント防止講習会を実施	9
教務学生事務担当者実務研修を実施	9
●知の未来へー若手研究者の紹介	
望ましい取引ルールを探る	10
太田 亘（大学院経済学研究科助教授）	
抗血管新生癌治療法の開発ー核酸医薬による癌治療への挑戦	11
武井 佳史（大学院医学系研究科講師）	
●知の先端	
ソシユールの探究ー言語、この果て知れぬものー	12
松澤 和宏（大学院文学研究科教授／高等研究院教授）	
塩害を防ぐ仕組みにたどりつくまで	14
魚住 信之（生物機能開発利用研究センター教授／高等研究院教員）	
●教育のデザインとプラクティス	
発信型研究者養成を目指す法学・政治学教育	16
石井 三記（大学院法学研究科教授／大学院法学研究科総合法政専攻長）	
●オフタイム	
架空鉄道 村上 隆（大学院教育発達科学研究科長・教育学部長）	18
●同窓生から	
荻須のパリを探して 山田美佐子（稲沢市荻須記念美術館副主幹・学芸員）	19
●キャンパスクローズアップ	
医学部附属病院 新中央診療棟（第3回）	20
●学生の元気	
I'm feeling lucky!	22
萩原 正人（大学院情報科学研究科情報システム学専攻博士課程前期課程2年）	
名古屋大学体育会会長表彰式を挙げる	23
第42回須賀杯争奪駅伝競走大会を開催	24
航空部が東海・関西学生グライダー競技会で2年連続6度目の優勝	24
東海学生駅伝で63年ぶりに優勝	25
ボクシング部練習場が完成	26
●部局ニュース	
フライブルク大学における名古屋大学ビジネス訴訟研究所を設置	27
映像インスタレーションとパフォーマンス「cycling」公演が行われる	28
ドイツ化学産業におけるイノベーションを開催	29
第21回国際生物学賞記念シンポジウムを開催	30
平成17年度鶴舞公開講座を開催	31
附属農場・動物塚で動物慰霊祭を実施	31
第7回まちとすまいの集いを開催	31
情報科学研究科が基盤研究公開セミナーを開催	32
シンポジウム「ITとマイクログリッドの融合」を開催	32
環境医学国際シンポジウムを開催	33
環境医学研究所が外部懇話会を開催	33
「館長と話そう！2005」を開催	34
ICCAE2005年度第5回オープンセミナーを開催	34
博物館新着標本コーナーで蔵書票を展示	34
第7回博物館企画展等を開催	35
博物館が秋の体験実習を開催	36
●名大を表敬訪問された方々 平成17年9月16日～12月15日	37
●受賞者一覧	38
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年11月16日～12月15日	39
●イベントカレンダー	42
●ちょっと名大史	
名大グラウンド小史	44

第13回名古屋大学科学研究 オープンシンポジウムを開催





2	3
	4

1

- 1 講演する安藤環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授
- 2 講演する平野総長
- 3 講演する宮治文学研究科教授
- 4 講演する鮎京法政国際教育協力研究センター教授

第13回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムが、12月9日（金）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

このシンポジウムは、本学の様々な科学研究の成果を学内外に広く公表し、意見及び情報の交換を図ることを目的として、平成5年度から、時々の社会要請にあったテーマで開催されているものです。本学では、アジア諸国との交流を通して社会貢献を行うことを学術憲章にうたっており、現在、様々なアジア研究を進めるとともに、先端科学のアジアにおける拠点形成も行っていることから、今年度は、世界の熱

い視線が注がれているアジアに焦点を当て、「アジアとともに研究する～名古屋大学のアジア研究最先端～」をテーマに開催しました。

シンポジウムでは、組織委員長の竹中総長補佐のあいさつの後、平野総長による「名古屋大学のアジアとの研究・教育連携」と題する講演をはじめ、7名の講師によるアジアをフィールドとした最先端研究の発表が下記のとおり行われました。約100名の参加者は、最先端の研究でありながら、わかりやすい解説が加えられた講演に、最後まで熱心に耳を傾けていました。



「名古屋大学のアジアとの研究・教育連携」

総長 平野 眞一

「アジアの最先端有機化学～アジア地域の天然有機化合物研究～」

物質科学国際研究センター助手 久世 雅樹

「バーミヤン仏教壁画の年代研究の最前線」

博物館長 足立 守

年代測定総合研究センター教授 中村 俊夫

大学院文学研究科教授 宮治 昭

「アジア法整備支援のための実務・研究融合型比較法研究拠点」

法政国際教育協力研究センター教授 鮎京 正訓

「スマトラ沖地震から学ぶ東海・東南海・南海地震の予測」

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授 安藤 雅孝

名古屋大学 International Advisory Board を設置

本学の学術研究・教育の更なる充実・発展をはかるため、本学の研究・教育活動の現状等について、国際的水準に照らした評価等に基づく助言・提言を得ることを目的として、「名古屋大学 International Advisory Board」が、総長の諮問機関として設置されました。

International Advisory Board は、年 1 回開催され、委

員に就任していただいた国内外の著名な 7 名の学識経験者から、本学の学術活動等について、順次提言等を得ます。第 1 回は、平成 18 年 2 月 6 日（月）、7 日（火）に、名古屋市内のマリオットアソシアホテルにおいて開催され、高等研究院の研究活動全般、若手研究者の研究内容等について諮問し、助言・提言を得ることになっています。

【委員】

赤崎 勇 博士

名城大学教授、名古屋大学特別教授

[専門分野] 半導体工学・電子材料学

[略 歴]

- 1981年 名古屋大学教授
- 1992年 名古屋大学名誉教授
- 1995年 化合物半導体国際会議賞、H. Welker 金メダル受賞
- 1997年 紫綬褒章受章
- 2004年 文化功労者顕彰

IGNARRO, Louis J. 博士

UCLA 教授、名古屋大学名誉博士

[専門分野] 薬理学

[略 歴]

- 1979年 チューレン医科大学教授
- 1985年 UCLA 医学部教授
- 1994年 Roussel-Uclaf 賞受賞
- 1995年 チバ高血圧研究奨励賞受賞
- 1998年 ノーベル医学生理学賞受賞

池端 雪浦 博士

東京外国語大学長

[専門分野] 歴史学

[略 歴]

- 1989年 東京外国語大学教授
- 1998年 人文学名誉博士（フィリピン大学）
- 2001年 東京外国語大学長、文部科学省科学技術・学術審議会委員

李 遠 哲 博士

台湾中央研究院院長、名古屋大学名誉博士

[専門分野] 化学

[略 歴]

- 1973年 シカゴ大学教授
- 1974年 カリフォルニア大学教授
- 1994年 台湾中央研究院院長
- 1986年 ノーベル化学賞受賞、米国科学メダル受賞

野依 良治 博士

理化学研究所理事長、名古屋大学特別教授

[専門分野] 化学

[略 歴]

- 1972年 名古屋大学教授
- 1997年 名古屋大学大学院理学研究科長
- 2000年 文化勲章受章
- 2001年 ノーベル化学賞受賞、ウルフ賞受賞
- 2003年 理化学研究所理事長

STÜRNER, Rolf 博士

フライブルク大学教授、ハーバードロースクール客員教授

[専門分野] 民事訴訟法

[略 歴]

- 1976年 コンスタンツ大学教授
- 1981年 シュトゥットガルト・カールスルーエ高等裁判所判事
- 1993年 オーストリア・スイス・ドイツ民事訴訟法学会会長
- 2000年 フライブルク大学法学部長
- 2001年 ハーバードロースクール客員教授

ZINK, Michel 博士

コレージュ・ド・フランス副学長

[専門分野] 文学

[略 歴]

- 1964年 パリ高等師範学校入学
- 1976年 トゥールーズ大学教授
- 1987年 ソルボンヌ大学教授
- 2000年 フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス副学長

平野総長がタイ王国を訪問

－全学同窓会タイ国支部が設立される－



全学同窓会タイ国支部設立総会

平野総長は、12月13日（火）から18日（日）の間、タイ王国バンコクで、全学同窓会タイ国支部設立総会に出席するとともに、学术交流協定校等を訪問しました。

全学同窓会タイ国支部設立総会は、12月14日（水）、バンコク市内のラマ・ガーデンホテルにおいて行われ、平野総長及び伊藤全学同窓会代表幹事のあいさつ、支部役員の選任の後、平野総長から、Neunpanich Sinchaisri 同支部長に、認定証と支部旗が手渡されました。総会には、笈哲男全学同窓会関西支部長や竹林敏之在タイ日本国大使館一等書記官など約40名の同窓生が集い、盛大に支部設立を祝いました。また、総会終了後の懇親会は、タイにおける同窓会活動に尽力してきた齋藤哲夫名誉教授のあいさつで始まり、終始和やかな雰囲気の中、本学での思い出などを語る同窓生の姿がそこかしこで見られました。

その後、総長一行は、大学間協定を結んでいるカセサート大学及びチュラロンコン大学、タイ国教育省を訪問し、本学とタイの教育機関等との連携推進について意見交換を行いました。



カセサート大学での会見の様子

カセサート大学では、Viroch Impithuksa 学長、Thanwa Jitsanguan 国際交流担当副学長、Supamard Panichsakpatana 学術担当副学長等の幹部職員と会見し、持続可能な社会、鳥インフルエンザ等の分野での学術連携の可能性などについて意見交換を行うとともに、工学部、理学部、研究開発研究所及び図書館を訪問し、それぞれの研究活動等について懇談しました。

チュラロンコン大学では、Khunying Suchada Kiranandana 学長及び Scottiporn Chittmittrapap 副学長と会見し、大学の管理運営について意見交換を行った後、工学部で交流について意見交換を行い、また、アカデミック・リソース・センターを視察しました。

また、両大学は、AC21のメンバー機関であり、来年ウオリック大学で開催される国際フォーラム、今後進めるベンチマーキング活動等についても、連携して行うことを確認しました。

タイ国教育省では、本学経済学研究科修士生の Kitti Limskul 副大臣と会見し、平野総長から、全学同窓会タイ国支部の設立、カセサート、チュラロンコン両大学との協力関係について報告があり、環境科学等を中心に AC21との連携も含め、アジアでの交流を推進することについて合意しました。また、タイの高等教育政策の紹介、両国における自立した大学（Autonomous University）としての運営についての意見交換が行われ、最後に、同窓生のネットワークにより、本学、在タイ日本国大使館、タイ国教育省、チュラロンコン大学、カセサート大学等が連携して学術交流を推進することが合意されました。

高等研究院フォーラム2005を開催

－アジアの共通理解と総合的支援体制－



パネル・ディスカッション

高等研究院フォーラム2005が、11月25日（金）、文系総合館カンファレンスホールにおいて開催されました。

このフォーラムは、高等研究院に所属する研究者の研究成果を広く学内外に発信するとともに、特定の研究テーマを取り上げ、研究者間で意見交換を行うことを目的として開催されているもので、今回は、「アジアの共通理解と総合的支援体制」をテーマに行われ、本学の教職員や学生、一般市民など、約60名の参加がありました。

フォーラムでは、北住高等研究院長のあいさつの後、同院運営推進委員の和田壽弘文学研究科教授による司会進行のもと、杉浦法政国際教育協力研究センター長による「アジアと法整備支援」、高等研究院教員の近藤孝弘教育発達科学研究科助教授による「東アジアの歴史問題への政治教育的アプローチ：その必要性と可能性」、田中重好環境学研究科教授による「文化の翻訳：アジアにおける『公』と『私』の概念の比較」、高等研究院教員の多和田眞経済学研究科教授による「東海地域の産業クラスター分析と東アジアの産業クラスターの形成」及び高等研究院教員の中西 聡経

済学研究科教授による「災害復旧を通じた近代化：関東大震災と百貨店」と題する研究報告が行われ、アジアの共通理解の進展と総合的支援体制の確立についての提言がありました。

続いて、パネル・ディスカッションが、同院運営推進委員の長田 博国際開発研究科教授の司会進行により行われ、パネリストとして、研究報告者に加え、コン・テイリ法政国際教育協力研究センター助教授が、また、モデレーターとして、奥村隆平高等研究院副院長が参加し、アジア諸国における共同体のあり方や「公」と「私」の概念の違い、中国における企業活動の今後等について、専門分野を超えての活発な議論が行われました。

なお、高等研究院では、今後も同フォーラムを開催する予定です。



研究報告

東海地区信用金庫協会と「産学連携に関する協定書」を締結

本学と東海地域（愛知・岐阜・三重・静岡）の41信用金庫で構成される社団法人東海地区信用金庫協会（音瀬晴夫会長）との「産学連携に関する協定書」の調印式が、12月8日（木）、本部第2会議室において行われ、平野総長と音瀬会長が協定書に署名しました。



協定書に署名後、握手を交わす音瀬東海地区信用金庫協会会長（右）と平野総長（中央）

これは、地域経済の活性化と産学ネットワークの構築を目的として締結されたもので、具体的には、①知的財産の発掘、技術評価の権利化、特許等のコンサルティング、②ベンチャーキャピタルや経営サポート等の創業支援、③「大学の研究・技術情報」と「学外のニーズの集約」のマッチング、共同研究・受託研究の仲介・紹介、大学・金融機関の動向等の情報交換、④同協会に加盟する信用金庫主催のセミナー・講演会等への講師派遣を行います。

今回の締結により、本学としては、産業界のニーズに対して、大学の知的財産の社会的貢献、研究成果の社会への還元、産学の人材交流、優れた人材の育成等、ユーザーの視点に応えうる有効な産学連携の場を創出することができるとともに、理系が中心であった産学連携への文系の関与も期待されます。

また、調印式終了後に行われた記者会見では、報道関係者から多くの質問があるなど、今回の協定に対する関心の高さを伺わせました。

第28回名古屋大学シニアの会を開催

第28回名古屋大学シニアの会が、12月2日（金）、シンポジオンホールにおいて、会員99名、役員7名及び事務企画連絡協議会構成員45名の出席の下、開催されました。

この会は、本学の課長補佐相当以上の職にあった者で、退職又は転出した職員と、本学の事務局長はじめ部長、課長、事務長等との相互の交流を深め、また、本学の運営に

資することを目的として、毎年開催されているもので、今年度から名称が、「名古屋大学OB・職員懇談会」から「名古屋大学シニアの会」に改められました。

会は、平野総長による本学の現状等の報告を兼ねた歓迎のあいさつで始まり、本学の幹部職員の紹介が行われた後、シニアの会を代表して、山本 鉾元事務局長（中部大学名誉教授・学校法人三浦学園顧問）及び内田弘保元事務局長（二階堂学園理事）からあいさつがありました。続いて、豊田理事・事務局長の発声で乾杯が行われ、会員らが旧交を温める輪が会場のあちらこちらで見られるなど、終始和やかな雰囲気で開催されました。



懇談の様子



あいさつする（左から）平野総長、内田元事務局長、山本元事務局長

私立大学関係職員との意見交換会～OB職員(総務系)～を開催

私立大学関係職員との意見交換会～OB職員(総務系)～が、12月2日(金)、事務改善合理化委員会総務事務専門委員会の主催で、豊田講堂第一会議室において開催されました。

前回の意見交換会では、広島工業大学の堀道博監事による私学の現状や私学経営における考え方についての講演が行われ、業務遂行に対する意識改革を図る契機としたところですが、参加者からは、実務面についての具体的な話を聞いて



講師の森川氏(左)と後藤氏(右)

てみたいという意見も多くありました。こうした意見を踏まえ、今回は、本学に在職していた当時、総務系の業務に従事し、現在、私立大学に勤務しているOB職員を招き、「国立大学と私立大学の業務の相違点」をテーマに、総務事務専門委員会から提案された調査事項を中心に総務・人事業務の具体的な処理等について意見交換を行いました。

意見交換会には、講師として、元工学部・工学研究科事務部長で、現在、中部大学学務部長の森川一三氏と、元庶務部人事課課長補佐、香川医科大学総務部長で、現在、学校法人愛知江南学園事務局次長の後藤貞夫氏を迎え、総務企画部及び各部局の庶務・人事担当の事務職員約60名が参加しました。講師の方々には、事前に質問内容を送付していたこともあり、当日は、質問事項一つ一つに対し回答が準備され、質疑応答では、私立大学の現状について、実例を交えたわかりやすい説明があるなど、本学の参考になることも多く、実りある会となりました。

今回の意見交換会で得られたことを活かすべく、今後は、総務事務専門委員会を中心に総務・人事の業務改善についての検討を行い、効率的な業務運営に資することとしています。

個人情報保護に関する教育研修会を開催

平成17年度個人情報保護に関する教育研修会が、12月13日(火)、豊田講堂第一会議室において、個人情報の保護管理者、保護担当者等を対象に開催されました。

この研修会は、職員の保有個人情報の保護に関する意識を更に高めることを目的として開催されたもので、約80名の参加がありました。



講義する林名古屋市総務局企画部情報化推進課主査

研修会では、最初に、市橋総長補佐(法人化担当)から、研修会の目的及び意義についてあいさつがあった後、名古屋市総務局企画部情報化推進課の林弘一主査が、全国の自治体に先駆けて情報セキュリティ等に関する条例を制定した名古屋市における行政情報ネットワークの活用等に係るセキュリティ対策について、具体的な事例等を交えて説明しました。続いて、情報セキュリティ対策推進委員の竹内義則情報連携基盤センター助教授から、保有個人情報の漏えいの具体的な原因や個人情報保護規程に沿ったセキュリティ対策の内容等について解説があり、最後に、市橋総長補佐から、個人情報保護規程の趣旨、本学における個人情報の取り扱いについて、部局等からの保有個人情報の取り扱いに関する照会をまとめたQ & Aを用いて説明が行われました。

なお、本学では、今後も個人情報保護に関する研修会を開催することとしています。

永年勤続者表彰式を開催



表彰式終了後の記念撮影

平成17年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月22日（火）、豊田講堂第一会議室において行われました。

表彰式では、初めに、平野総長から、被表彰者50名のうち出席した48名一人一人に表彰状と記念品（銀盃）が手渡されました。続いて、総長から、「永年にわたりそれぞれの立場・分野においてご尽力された皆様にお祝いを申し上げます。法人化後、多くの課題が山積していますが、その解決に向けてここまで来ることができたことに対し皆様方に深く感謝しています。法人化を機にさらなる意識改革に努めて頂き、未来の名古屋大学と一緒に築き上げていきましょう。さらなるご活躍を心から期待しています。」と祝辞があった後、被表彰者を代表して、医学部附属病院の亀島加代氏から謝辞が述べられました。

セクシュアル・ハラスメント防止講習会を実施



班別討論をする参加者

職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止講習会が、11月17日（木）、シンポジオンホールにおいて、掛長以上の職員を対象に実施されました。

この講習会は、セクハラの実態と早期発見・防止を目的として開催されたもので、約100名の参加がありました。

講習会では、唐澤総長補佐（人権担当）による本学のセクハラ防止対策に関する説明の後、株式会社イーブ代表取締役会長の杉口正子講師から、「リスクマネジメントとしてのセクハラ防止対策」と題し、セクハラの実態、組織のリスクマネジメント及び防止対策について、ケーススタディや班別討論を交えた講演があり、参加者は管理職としての対処方法等について理解を深めました。

本学では、主任以下の職員や非常勤職員等を対象とした研修や、部局ごとに教員や学生を対象とした研修も実施しており、今後も講習会でのアンケート結果を参考に、セクハラ防止対策に取り組んでいくことにしています。

教務学生事務担当者実務研修を実施



研修の様子

平成17年度教務学生事務担当者実務研修が、11月17日（木）、18日（金）の2日間、東海地区国立大学共同中津川研修センターにおいて実施されました。

この研修は、本学の現状及び教育に関する業務の円滑な処理に必要な知識を習得させ、事務効率の向上及び学生サービスの向上・充実に資することを目的として実施されたもので、教務学生事務実務担当者17名が参加しました。

研修では、教員による全学教育に関する事項や悩みを持つ学生への対応についての講演、事務職員による本学の財政、留学生対応、学生生活支援の現状等についての業務解説のほか、「これからの大学職員に求められるもの」等をテーマに分科会が行われ、活発な議論が交わされました。また、講演終了後などには、教員を交えて、自由に活発な話し合いが行われるなど、充実した研修となりました。

望ましい取引ルールを探る

太田 亘 大学院経済学研究科助教授

最近の小売り店には、100円ショップがあり、99円ショップもありますが、101円ショップは見かけません。これはどうしてでしょうか。一つの理由は、切りのよい価格を提示するという戦略により100円ショップができ、それとの対抗上、1円安い99円ショップができたのですが、101円ショップはお客さんを集められないので見かけない、というものでしょう。

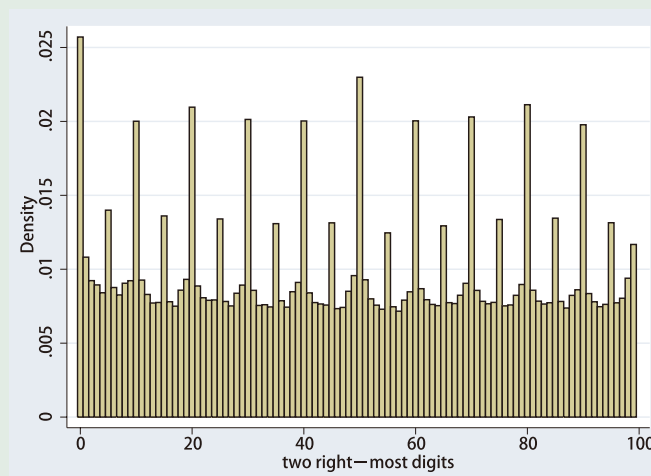
同様の現象は、株式市場でも見られます。表は、東京証券取引所第1部の2001年9月から半年間の取引のうち、価格が1000円超2000円未満の取引について、価格の末尾2桁—00から99—ごとの取引の比率を示したものです。他よりも飛び抜けて高い柱が10本ありますが、これは価格の末尾2桁が00、10、20などの取引が多いことを示しています。次に高い柱が10本ありますが、これらは、一の位が5の価格での取引です。つまり株式は、1120円や1125円など、切りのよい価格で頻繁に売買されています。これは、100円という切りのよい価格を提示する小売り店が頻出しているのに似ています。

切りのよい価格での取引は、値段がよくわからない場合に行われることがわかっています。例えば、知名度の低い会社の株式は、切りのよい価格で取引される傾向にあります。逆に、皆が知っているような大会社の株式では、より細かい価格付けがなされます。

切りのよい数字での取引が多いのは、価格を

指定した注文（指値注文）を出す人が、切りのよい数字を選択しているためです。このような投資家行動の結果、例えば1100円で売り注文が多く、1090円で買い注文が多くなります。東京証券取引所のルールでは、同じ価格の注文がある場合、先に出された注文が優先されます。そのため、1100円で売り注文が多い状態で1100円の売り注文を出すと、優先順位が低くなります。一方、売り注文の中では、価格の低い注文が優先されます。そのため、1100円よりも1円低い1099円の売り注文を出す方が、売しやすくなります。ちょうど、100円ショップに対抗して、99円ショップが開店するのと同じです。逆に買い注文の場合は、1090円よりも1091円の方が、売買が容易です。但し、この1円の差により、実際にどれほど売買が容易になるかは、まだ明らかではありません。

私の研究は、証券市場における取引の特徴を明らかにすることにあります。それを踏まえて、どのような取引ルールが望ましいかを考えています。実は、東京証券取引所の現行ルールでは、2000円までは価格の刻みが1円ですが、2000円から3000円は5円刻みで、2005円の注文は出せませんが、2001円の注文は出せません。例えば、2000円未満の価格帯でも、刻みを5円にした方がよいでしょうか。この問題に答えるためには、切りのよい数字を選ぶという投資家行動に加え、その他様々な要因を考慮する必要があり、私の研究テーマの一つとなっています。



横軸は価格の末尾2桁、縦軸はその価格での取引の比率を表しています。例えば横軸の20は、1120円や1220円など、末尾が20の価格を意味します。柱の高さは、そのような価格で行われた取引の比率を表します。同様に、横軸が21における柱の高さは、1121円や1221円など、末尾2桁が21の価格での取引の比率を表しています。

抗血管新生癌治療法の開発 —核酸医薬による癌治療への挑戦

武井 佳史 大学院医学系研究科講師

2本鎖RNAによる塩基配列特異的な標的RNA分解機構であるRNA interference (RNAi) は、その特異性と発現抑制効果の高さから、エイズ・癌・遺伝性疾患など、現状、治療が困難な疾患に対する打開策として期待が高まっています。私はこのRNAi法を用いて、癌の血管新生を分子標的とした癌治療の研究を進めています。腫瘍が増殖をし続けるためには常に栄養と酸素の補給・老廃物の排出を行う血管が必要不可欠です。腫瘍は周辺組織から血管を誘導し、自らに栄養を補給し始めます。即ち、腫瘍は血管内皮増殖因子 (Vascular endothelial growth factor, VEGF) を主力とする血管新生因子を産生して、血管新生を惹起し、自らの生存をはかります。私はこのVEGFの発現を抑制するRNAi (合成 siRNA を用いる) を確立し、ヒト前立腺癌をヌードマウス皮下に移植した腫瘍モデルの治療実験に成功しました (図1)。VEGFの発現を抑制する効果のある siRNA をバイオマテリアル・アテロコラーゲンと混合して腫瘍に注入すると、腫瘍内のVEGFの発現量が減少し、それに伴って、腫瘍内の微小血管数 (密

度)も減少しました。本治療法により、癌が栄養物を得る血管補給路を断つことに成功しました。siRNAの生体内での安定性と腫瘍細胞内導入にアテロコラーゲンを用いたドラッグデリバリーも奏功しました。現在、癌転移を抑える治療法と siRNAの全身性投与に関する研究を進めています。



図1 VEGFの発現を抑制する siRNA による癌治療効果



図2 成果発表「Anti-Angiogenesis and Drug Delivery to Tumors: Bench to Bedside and Back」を行った米国癌学会の特別会議 (ボストン) にて左が筆者 中央が議長の Dr. Rakesh K Jain (Massachusetts General Hospital)

【血管内皮増殖因子 (VEGF)】

VEGFは血管内皮細胞に強い特異性を示すヘパリン結合性の血管新生を促す増殖因子として、1989年 Ferraraらによって下垂体濾胞星状細胞の培養上清より見出された。遺伝子クローニングの結果、1983年に Sengerらによってすでに見出されていた Vascular permeability factor (VPF) と同一であることが明らかにされた。VPFは腫瘍を移植した際の貯留腹水の解析から、腫瘍血管において蛋白の透過性を亢進する活性を指標に精製された。現在では、VEGF/VPFあるいは単にVEGFと表記される。VEGFは分子量約20 kDaのサブユニットからなる二量体構造を示す。VEGFのノックアウトマウスはホムだけでなくヘテロにおいても、心血管系の形成異常により胎生致死となる。in vitroにおいて、VEGFは血管内皮細胞の増殖・遊走・管腔形成を促進する。これまでに下記の5種のVEGF関連因子が単離・クローニングされている：胎盤由来増殖因子 (Placenta growth factor, PlGF)、VEGF-B、VEGF-C、VEGF-D、VEGF-E。これらの関連因子と区別するため、近年VEGFはVEGF-Aと表記されることが多い。

ソシュールの探究—言語、この果て知れぬもの—

松澤 和宏 大学院文学研究科教授／高等研究院教授

フェルディナン・ド・ソシュール（1857～1913）は、構造主義や記号学の創始者として知られています。通説によれば、ソシュールは、言語の歴史的变化を研究する歴史言語学の流れに抗して、共時言語学の提唱をしたことで人文学的思考のあり方の転換をもたらしました。チェスのある局面を理解するには、その局面に至った経緯を知らなくても支障がないように、今日の日本人は、

平安時代の言語状態や言語の歴史的変遷について知らなくても、日本語を理解し使用することができます。話し手の意識は過去の忘却の上に成立しており、その意識に問いかけることによって、文法的な体系性を帯びた言語状態が現象してきます。変化をもたらす時間を除外して、ある時点の静態的な言語状態、すなわち共時態を対象として研究するのが共時言語学ということになります。

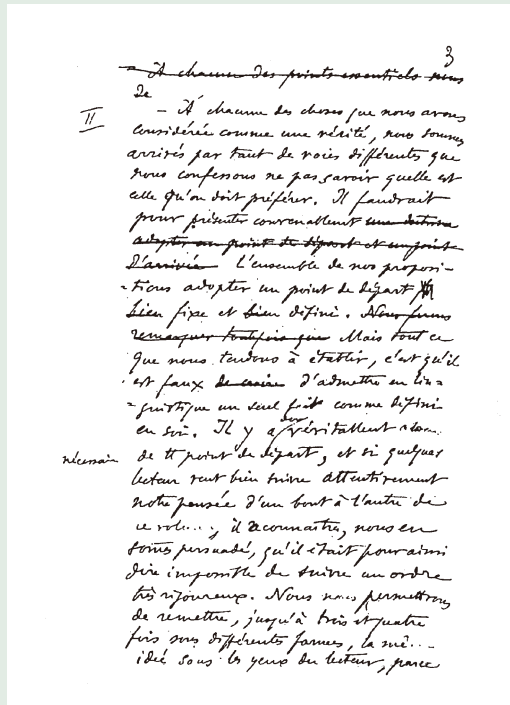


図1 ソシュールの自筆原稿
言語研究においては出発点や厳密な順序は存在しえないと書き留められている。

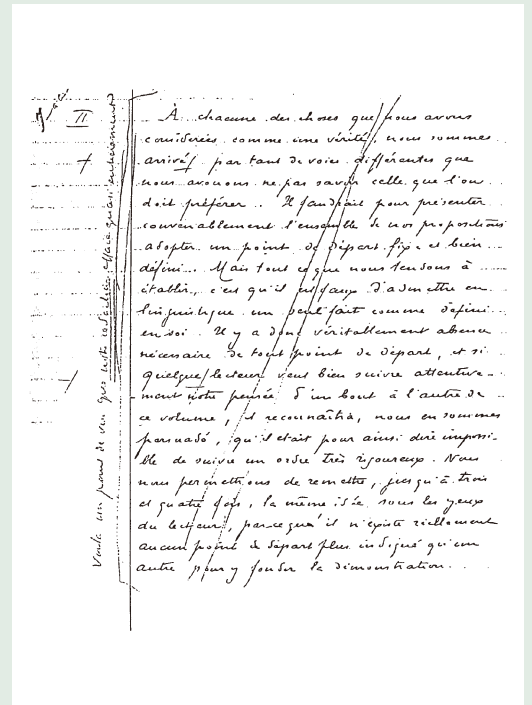


図2 『一般言語学講義』の編著者によるソシュールの草稿（図1）の書写。欄外に「利用不可能」「このような観点はわれわれの執筆では削除される」と書かれている。

ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』(1916)は、20世紀の人文科学全般に計り知れない影響を及ぼし、共時言語学は構造主義という名の下に1960年代に知的ルネッサンスを招きました。ところが、そこにはある陥穽が待ち受けていたのです。『一般言語学講義』は、実はソシュールの著書ではなく、ソシュールの死後二人の弟子によって、編纂・執筆された編著書なのです。書名にも採られている一般言語学講義は、前任者の辞職のために、ジュネーヴ大学当局の決定によりソシュールが晩年に行った講義題目ですが、彼がこの講義の担当を希望した形跡はありません。ソシュールは言語に関する「書物」を1890年代に構想したもの、間もなく断念放棄に至った事実が今日では判明しています。

ソシュールはなぜ「書物」を断念したのでしょうか。その理由を知るには、彼が遺した膨大な草稿を徹底的に読み解くほかありません。ところが『一般言語学講義』が高く評価されたため、草稿の本格的な研究が長年にわたって停滞してきたのです。では弟子による編著書とソシュールの思想との相違は一体どこにあるのでしょうか。ソシュールは、管見の限りでは、1890年代に書き残した草稿において「一般言語学」という名称を一度たりとも書き留めてはいないのです。この事実こそソシュールと『一般言語学講義』との間の懸隔を如実に示しています。ソシュールは晩年の講義で「なぜ私たちは『人間』とか『犬』と言

うのでしょうか。私たちより前にそのように言われてきたからです。正当化は時間のなかにあります」と述べています。日本語で dog ではなく犬と言う理由は合理的には説明できません。そこに恣意性という深淵が口を開いています。しかしソシュールはその恣意性の裡に伝承を通して堆積された時間の効果を看取していたのです。人類がこの地球上に生を享けて以来、言葉を使わないで暮らした日は一日たりともありません。昨日話していた言葉を今日使い明日も使うという持続性、人類の原始時代にまで遡る気の遠くなるような継続性のなかにしか、言語は究極の根拠を持ち得ないのです。言葉の使用は時を経ることによって慣用となり、われわれの精神と一体化した生きた言語となります。したがって、通説に反して、私たちの言語意識は実は伝承の堆積の結晶であり、不可視の時に支えられているのだと言わなければならないのです。それは時間の効果、すなわち時効と言ひ換えることもできます。『一般言語学講義』の編著者が、理論化し難いがゆえに削除した「時間による正当化」の一句にこそ、言ひ継がれ語り継がれていくことで転生を重ねていく言葉という果て知れぬものが刻印されていたのではないのでしょうか。ソシュールの草稿から浮かび上がってくる情景とは、ありふれた理路をもってする説明を受けつけぬ言語の思想が、嵐のように、小さな個体を通してゆくときの、未完了の壮観なのです。

1953年 東京に生まれる。
 1988年 バリ第8大学で文学博士号取得
 1992年 フローベールの草稿研究(仏文著作)により渋沢・クロード賞本賞受賞
 1997年 フランス国立科学研究センター客員研究員
 1998年 名古屋大学文学部教授
 2004年 『生成論の探究—テキスト・草稿・エクリチュール』により宮沢賢治賞受賞
 現在 名古屋大学大学院文学研究科教授、高等研究院教授、フランス国立科学研究センター近代テキスト草稿研究所日本側通信員、日本フランス語フランス文学会中部支部長
 モットー：死者とともに生きてゆくこと

まつざわ かずひろ



塩害を防ぐ仕組みにたどりつくまで

魚住 信之 生物機能開発利用研究センター教授／高等研究院教員

手足のある我々ヒトは渴きを感じると自分で水分を補給することができます。しかし、動く手段を持たない草木や運動範囲が小さい微生物などは雨が降らないと乾燥にさらされ、大変な生存の危機に見舞われることとなります。それにもかかわらず、半月や1ヶ月くらい雨が降らなくても周辺の草木は枯れずに生育しています。気づきにくいことですが、実は乾燥に耐える仕組みが植物や微生物には備わっているのです。耐乾燥性や耐塩性は地球規模で進行する砂漠化への対処や生育限界の拡大などに有効な性質であるため、世界中で研究者が環境変化への適応メカニズムの解明と、それに関与する生体装置を追い求めています。

水を体内に取り込むには、水を細胞に吸収する透過装置があればよいと考えるのがふつうです。しかし、水というのは簡単に周りの環境に左右され移動してしまいます。たとえば、野菜を塩や砂糖づけにすれば脱水が起こり野菜はしんなりします。また、私たちは甘いお菓子や塩辛いものを食べれば水が飲みたくなります。これは高校の化学で習う浸透圧と関係があり、乾燥と塩ストレスはもとは同じ物理現象なのです。つまり水を汲み入れる装置だけでは耐乾燥性や耐塩性を持つことはできないのです。脱水を防ぐには、細胞の中に水以外の物質を取り入れる装置も必要で、蓄積したその物質の力で水が逃げるのを止める必要があります。この吸収される物質は細胞にやさしいものが望まれます。Kはもともと細胞の中に最も多量に含まれている金属元素（イオン）で、細胞内に吸収しても悪いことは起こりません。

私たちは、Kを取り入れると考えられる輸送装置の遺伝子を、実験によく使用するシロイヌナズ

ナという植物から取り出しました。この生体装置は大腸菌や小麦のKを輸送する装置とほぼ同じ形でしたので、当然Kを輸送すると思っていました。ところが、どうしたことが全くKを輸送する機能は検出できませんでした。この研究分野の“常識”では、大腸菌や小麦で起こることはシロイヌナズナでも稲でも杉でも、または乳酸菌でも同じように起こるはずなのです。あれこれ調べてみるのですが全くうまくいきませんでした。しかし、ある時Naが通過するのではないだろうかと予想しました。はじめから予想すれば良いことですが、しばらく“常識”に束縛されていたのです。調べてみるとやはりNaが透過しました。植物ではじめてNaを選択的に細胞の中へ取り込む装置の存在が明らかになりました（2000年）。

この結果は次の疑問を生み出しました。Kを運び入れるのかNaを通すのかの違いは、実は植物にとっては良いものと悪いものの差ほどのとても大きな違いがあります。先ほど記したようにKは植物の細胞には良い物質で植物の必須栄養元素の一つです。一方、Naは塩害を引き起こす悪役で、Naは植物の生育にはなくてもすむのです。実際、このNaの輸送装置を植物細胞に似ているパン酵母で働かせると、Naを酵母が沢山取り込んでしまい細胞の生育を悪くします。では、なぜ塩害の手助けをするような、存在しない方が良いと思われるNaを輸送する装置をシロイヌナズナという植物は持っているのでしょうか。

このNa取り込み装置は存在しないほうがNaの体内への侵入が減り塩害を軽減するようになると予想しました。そこで、このNa輸送装置が壊れているシロイヌナズナ植物（変異株といいま

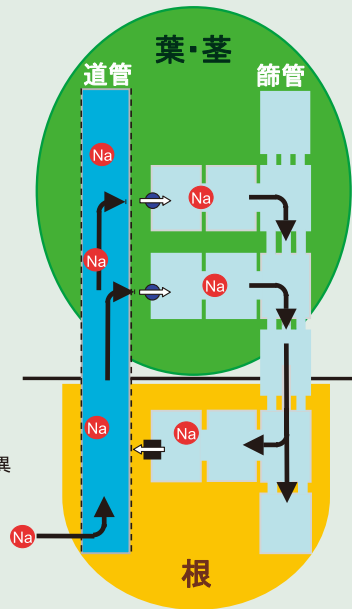
す)を調べました。ところが、意外な結果になりました。このNa輸送系を持っていないとNa濃度の高い生育環境では育たない、つまり塩害に弱い植物になったのです。Naを“排出”する装置ならば理にかなった話ですが、Naを体内に入れる装置が塩害対策に必要とは予想外です。そこで、さらに研究をすすめました。そして得られた結論は、Naの濃度が高い塩ストレス生育環境では、植物は高浸透圧にさらされ脱水の危機に直面しますが、そのときはこの装置によってNaをわざと植物内に取り込んで細胞内の浸透圧を上げて脱水を防いでいるということでした(2005年)。また、この輸送装置は、今まで存在がぼんやりしていたNa循環系の重要な因子の一つであることもわ

かってきました。植物におけるNa再循環(Na recirculation)という概念が唱えられ、この装置がその中心的な役割を担っていると考えられています。

ここまできて感じることは、生物はしたたかということです。外にNaが蓄積したときは、塩害の原因となるNaをあえて体内に取り込み浸透圧の調整に利用する仕組みをシロイヌナズナなどの植物は発達させたのです。当初は予想もしなかった耐塩性(耐乾燥性)メカニズムの存在が分かっ



正常植物 一つの遺伝子が異常になった植物



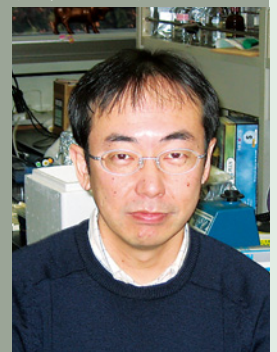
左：塩ストレス環境の植物。2万個以上ある遺伝子の中でたった1つの遺伝子が壊れている植物の葉や茎は塩害を受ける。壊れた遺伝子の産物は塩害を防ぐ機能をもつことが推定できる。

右：遺伝子の正体を調べた。根から吸い上げられたNaは、道管を通り、道管横の葉の細胞から入る。その細胞にNaの輸送装置が存在している。この輸送装置がないと、Naが道管に蓄積して植物細胞が脱水状態になり枯れる。この装置は微生物にもあるが、動物にはない。

てきました。しかし未解決の問題が残っています。植物細胞には好ましくはないNaを、脱水を防ぐためとはいえ植物の細胞が取り込んでも大丈夫なのはなぜなのでしょう。現在この模範回答を用意して、その予想を証明するべく研究をすすめています。しかし、歴史は繰り返します。研究がすすめば、また私たちを悩ませる結果が導かれる気がしています。思いも及ばない自然の巧妙な仕組みに私たちはいつも驚嘆させられています。

1963年12月29日生まれ
 1989年 名古屋大学大学院農学研究科博士課程後期中退
 1989年 名古屋大学工学部助手
 1993年 カリフォルニア大学サンディエゴ校博士研究員
 1995年 名古屋大学生物分子応答研究センター助教授
 2004年 名古屋大学生物機能開発利用研究センター教授
 2004年 名古屋大学高等研究院教員
 ひとこと：学生や研究者の発展を手助けしたいと思っています。

うおずみ のぶゆき



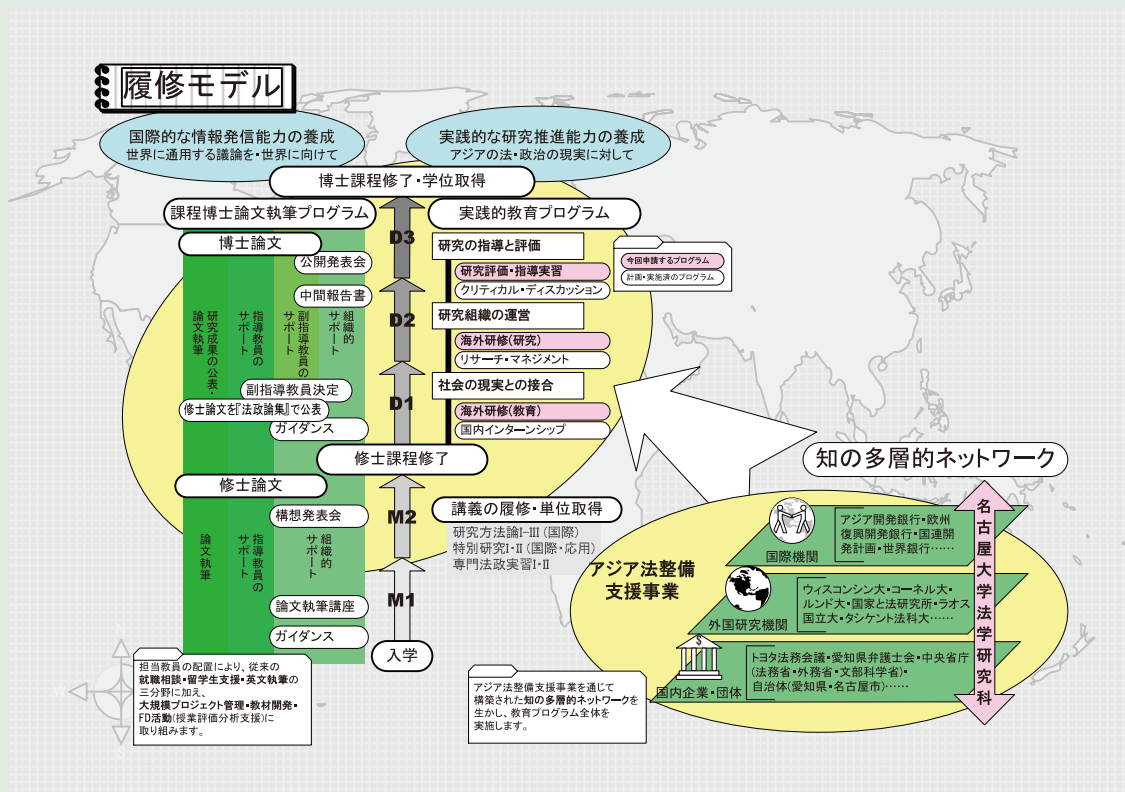
発信型研究者養成を目指す法学・政治学教育

石井 三記 大学院法学研究科教授／大学院法学研究科総合法政専攻長

このたび、名古屋大学大学院法学研究科・総合法政専攻は、文部科学省の「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択されました。「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進

することを目的として、今年度からはじまった事業です。7月末に募集がはじまり、全国の国公立大学から応募のあった147大学338件のうち、45大学97件が採択されました。本学からは、4件の採択がありました。

今回、本法学研究科・総合法政専攻が申請して採択されました「発信型研究者養成を目指す法学・政治学教育」の教育プログラムの概要は、今まで本法学研究科が取り組んできたアジア法整備支援



事業で培ってきた知の多層的ネットワークを活用して、世界に通用する議論を発信できるような研究者の育成を目的にし、課程博士論文執筆のプログラム、大学院生による主体的な研究会の組織運営、さらに、来年度に予定されている優秀な大学院生の海外研修などを柱にしています。

プログラム名称のキーワードである「発信型」ということばには、二つの意味がこめられています。一つは学問内容面にかかわることで、輸入適用型の学問から発信型の学問への転換ということでもあります。すなわち、従来のがが国の法学・政治学は、歴史的な経緯からして、欧米の学問を輸入し、適用する側面に重点がおかれていました。しかし、その手法の限界を認識し、アジア社会の現実の中から、たとえば、従来は前近代的なものとして切り捨てられていたような社会規範や社会秩序から、新たな法・政治概念を打ちたて、世界に向けて問い返すような研究の構えも必要だと考えているわけです。

もう一つの意味は、研究者養成の過程の中で、「発信型」の研究手法を積極的に学び、習得していくということでもあります。具体的には、大学院生も国際的な情報発信能力を身につけ、早い段階から共同研究を立案組織したり、国際シンポジウムのプロジェクトに携わるなど、研究マネジメントの修練を積んでいってもらうことを考えています。このために、本法学研究科が「アジア法整備支援」などで築いてきました「知の多層的ネットワーク（国際機関、外国研究機関、国内企業・団

体）」を活用していくことになります。

本法学研究科ならではの教育プログラムを、ひとつ、ご紹介しましょう。それは来年度実施される大学院生の海外研修であります。これは、大学院生を単に海外に送り出すということではなく、同じ学生を、たとえば、半分の期間はアジアの法整備支援対象国に、のこりの半分の期間は欧米の研究拠点に送り出すことによって、大学院生が複眼的な視野をもつことができるようになることを目的にしております。新しい分野、異なる分野にも対応できる柔軟な発想力を育成すると同時に、アジアでの日本法政治教育の経験もしてきてもらうものなのです。

このような取組について、独立行政法人日本学術振興会が運営審査する「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会からは、「アジアの伝統的な法・政治の現実の中から新しい秩序像を模索し、世界に通用する議論を世界に向けて問うことのできる高度の情報発信能力を備えた研究者の養成」という狙いは斬新であり、発展的である、との評価を受け、採択されました。

本法学研究科は、これからも「創造的な研究活動」と「自発性を重視する教育」という基本理念の下、現代社会にたいする鋭敏な問題意識と判断力を持ち、「次世代の世界レベルの研究者、或いは組織・社会のリーダー」となりうる若手研究者の育成に努力し、「魅力ある大学院教育」を目指します。

1985年京都大学大学院法学研究科単位取得退学。同年和歌山県立医科大学進学課程講師、同助教授、1993年東海大学法学部助教授、教授を経て、1999年名古屋大学大学院法学研究科教授。専門は、西洋法制史。趣味などないが、おもに法律関係の人名のついたバリの通りの写真を撮り続けるようにしている。最近では、偶然、気づいてみればボワソナード通り（14区）を歩いている、写真に撮ったが、明治期に来日したボワソナードその人ではなく、その父親（ギリシア学者）のほうだった。

いしい みつき



架空鉄道



著者近影。東海交通事業城北線キハ11と。実はこの鉄道、いかなる架鉄野郎の想像力も上回る架鉄以上の架鉄なのである。「事实は妄想よりも奇なり！」

鉄道に興味を持つ幼児は多い。私も絵本の余白から積み木の箱の裏まで、電車の絵の落書きで埋め尽くしたものだ。成長するに及んでなお、鉄道を趣味の対象とする者が少なくないことは、大きめの書店の雑誌コーナーの一角をご覧になれば一目瞭然である。鉄道マニア(rail enthusiast)は、「先進諸国」には必ず生息しており、定期行物としての趣味誌、厚手の写真集、学術書並みの専門書等はその国にもある。

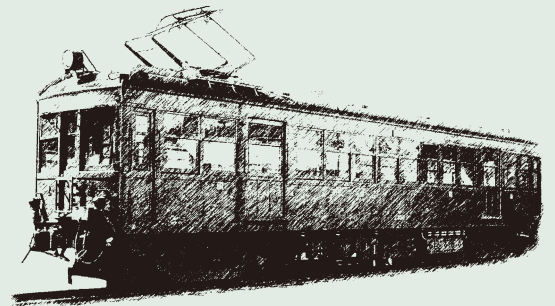
この世界は、男女共同参画が遅れている。もっとも、「旅」というコンセプトが加われば、女性に理解されるチャンスも皆無ではない。なにしろ、時刻表を検索するのは速いし、旅行計画の立案はお手の物と言っていい。しかし、どうしてもマニアックなルート、スケジュールの選択になりがちであるし、目的地に到着しても定番の観光地には目もくれず、線路端でカメラを手に滅多にこない列車を待ち続けるなどということになれば、呆れられ見放されるのは必定である。

それでも、写真や模型、「鉄道グッズ」のコレクション等、ともかくも実体のあるものが対象なら、理解や共感は得られずとも、趣味としての成立は認められよう。しかし、実世界には存在しない路線を、お気に入りの車輦が走るのを想像して楽しむということになるとどうであろうか。リビングの床に積み上げられた趣味誌や写真集は、もっぱらその想像をかきたてるためにあり、「1957年8月に国鉄で廃車解体されたはずの旧宮城電鉄のモハ802が、車体を濃緑色に塗り替え番号もデハ31と改めて、岐阜県南西部の輪中地帯の草むした線路を、夕日を浴びて左右に揺らぎながら時速

40kmで走って来る。自分にはその光景が、ジョイント音とともにありありと思ひ浮かぶ」などと口走るとすれば…。

信じ難いことに、この架空鉄道と呼ばれる趣味は実在するのである。趣味者が自らの「架鉄」を公開する Web site は、ちょっと検索すれば100以上見つかる。退職後の私の終わりのないオフタイムも、国土地理院から入手した昭和30年代の5万分の一の地図、国交省に開示請求して手に入れた車輦の竣工図、愛知環状鉄道が販売しているダイアグラム作成ソフト、あちこちの図書館に散在する地方史の資料等を駆使して、幻の「南濃電鉄」の沿革、路線、車輦、運転、経営等を実体化する作業に費やされるであろう。

幾年か後、消息不明となった私を、万一探してやろうとお考えになった時には、特養老人ホーム等を訪ね廻ったりせず、「架空鉄道」のキーワードでネット・サーフしていただくようお願いしたい。



旧宮城電鉄の電車。本文で言及したモハ802とほぼ同じデザインの車輦である。「私鉄買収国電」(佐伯保雄・佐竹晃/ネコ・パブリッシング)より。

荻須のパリを探して

稲沢市荻須記念美術館副主幹・学芸員
山田美佐子



荻須高德作〈モンマルトルの店〉の現地写真 稲沢市荻須記念美術館では、この建物を描いた油彩画を所蔵しています（2005年5月撮影）

荻須高德（1901-86）は、稲沢市に生まれ、東京美術学校卒業後渡欧、第二次世界大戦中を除いてパリを中心にヨーロッパの風景を描き続けた洋画家です。その記念美術館が稲沢市に開館したのは1983年8月。私は開館以来、この館の学芸員として展覧会の開催、教育普及活動、作品収集などに携わっています。中でも近年では、荻須作品の調査研究に力を入れています。

さて、荻須が描いたパリ。その現場に立ち、対象がどのようにとらえられているのか検証するのも一つの研究方法と考え、1997年と2005年の2回、私費により現地調査を行いました。特に第2

回はパリ在住の荻須美代子夫人の協力を仰ぎ、パリ市内だけでなく、トリエル、マント・ラ・ジョリ、ヴェトイユなどの近郊も訪れることができました。

調査は、作品のタイトルにある地名や通り、教会の名前などを手がかりに制作地を推定し、作品の画像と同じアングルを探し出し写真を撮影するものです。しかし、エリア全体が再開発で様相を一変していたり、趣のあった建物が近代的なビルに建て替えられてしまったり、美しかった店の色が塗り替えられてしまったりと、景観の移ろいやすさを目の当たりにする残念なケースも多々あります。ですから、荻須が数十年前に描いたそのままの風景が残っていた時は感動と同時に安堵で胸をなでおろす気持ちです。

荻須の画風は「観光名所ではなく、庶民の暮らす裏町を描いた」ことが特色とされていますが、その場に立つと、荻須が街並を構成する美の最もよく表れている場所を選択し、抽出して描いていることを強く感じます。遠くパリから日本へ、その文化、伝統、美意識の本質を伝えたいという思いが作品に込められていること、そして、美が日常生活に根付いているからこそ観光名所ではなく生活の場である裏町を描いたのだということがわかるのです。

2006年は荻須の没後20年にあたります。秋には、調査の結果を反映した展覧会の開催を予定していますので、皆様にも、ぜひ当館へ足をお運びいただきたいと思います。

やまだ みさこ
1960年名古屋生まれ
旧姓恒川
1983年文学部哲学科美学美術史卒業、同年稲沢市に採用される。教育委員会・美術館に配属、現在にいたる。



稲沢市荻須記念美術館前にて（2005年12月撮影）

10. 医学部附属病院 新中央診療棟（第3回）

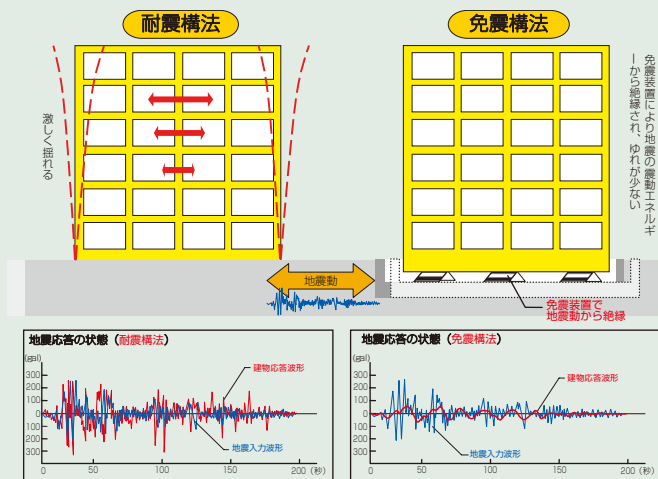


キャンパススクロースアップ新中央診療棟、第3回はこの建物の構造について紹介します。

新中央診療棟は、名古屋大学で初めて建てられた免震構造の建物です。強度を増して地震に耐える耐震構造に対して、地震の揺れ（振動エネルギー）を直接建物に伝えないようにしたのが免震構造です。免震構造は、建物そのものの被害を防ぐだけでなく、家具・備品の転倒や破損等の2次災害も最小限に抑えることができ、地震時の安全性確保が可能となります。兵庫県南部地震や新潟県中越地震でも、免震構造を採用した建物では、地震直後から初動対応が可能でした。また、過去には地震時でも継続的に手術を行うことができた実績もあります。

今回、新中央診療棟で免震構造を採用した理由は、東海・東南海地震が発生すると東海地域を中心に広い範囲で大きな被害が生じると予想されるためです。従来より、東海地震発生によって著しい被害が予想される地域は、大規模地震対策特別措置法により「地震防災対策強化地域」として指定され、静岡県を中心に数々の防災対策の強化が図られてきました。名古屋市も、平成14年4月24日内閣府公示で見直された新しい地震防災対策強化地域に含まれることとなり、以後、地震に対する関心が高まりました。

中央診療棟は高度先端医療の開発・研究・提供や医師の育成を行うばかりでなく、災害時には救急医療活動の拠点として機能すべき施設であります。巨大地震直後でもその医療機能を維持するために、特に耐震安全性を確保すべき重要な建物として高い目標耐震性能を設定しました。高い目標耐震性能の確保に加え、医療機能を維持するためには、従来の耐震構造や制震構造よりも、揺れそのものを軽減できる免震構造が最適であると考え採用することとしました。また、従来の耐震構造で建てた場合には柱の間隔が経済的な間隔で6～7mであるものが、免震構造の採用に



装置名称	諸値	基数	概念図または写真
鉛プラグ入り積層ゴム支承	ゴム径：1,000～1,300Φ 鉛プラグ径：200～240mm	72基	106基 概念図または写真 ボルト穴、鉛プラグ、天然ゴム、内部鋼板、被覆ゴム、フランジ（縦ポリチステン製）
天然ゴム系積層ゴム支承	ゴム径：900～1,200Φ	34基	106基 概念図または写真 ボルト穴、天然ゴム、内部鋼板、被覆ゴム、フランジ（縦ポリチステン製）
転がりローラー支承	長期支持力：800kN 長期支持力：1,304kN	4基	概念図または写真 （THK製）
オイルダンパー	最大減衰力：1,000kN	8基	概念図または写真 （カヤハ工業製）



- 1 北東外観
- 2 免震構法
- 3 新中央診療棟に使用している免震装置
- 4 設置された免震装置
(1基で最大約14,000kN (1,400t) の加重を支える)
- 5 免震装置設置作業の様子

より地震力が軽減されるため、柱間隔を7.2m × 9.0m と広くすることができました。これにより、医療技術の進展に伴う部屋の模様替え等を容易にすることが可能となりました。

免震構造では、地震の揺れ（振動エネルギー）を直接建物に伝えないようにするために、基礎部と上部構造の間に絶縁体の役割をする免震装置を設置します。この建物では地下2階と地下1階の間に高さ3mの免震層という免震装置を設置する層を設け、鉛プラグ入り積層ゴム支承72基（直径1.0m～1.3m）、天然ゴム系積層ゴム支承34基（直径0.9m～1.2m）、転がりローラー支承4基（渡り廊下）、オイルダンパー8基（最大減衰力1,000kN）の4種類の免震装置をバランス良く配置し免震します。大地震時には地面に対して建物が横方向に最大50cm動くことがありますが、積層ゴムにより長周期化して地震の揺れから逃れ、揺れを鉛プラグとオイルダンパーによって減衰させて止める仕組みになっています。

したがって、階段とエレベータシャフトは地下2階との縁を切るため、地下1階から吊り下げた構造になっています。また、1階などでは揺れた時に建物が他の構造物（よう壁）や地面とぶつからないように70cmの間隔（クリアランス）を設けています。

積層ゴムの表面劣化に対し不安を感じる人のためにこれを確認した実験結果を紹介します。オーストラリアの鉄道橋の支持部分に使われていた約100年前の天然ゴムの化学分析を(株)ブリヂストン研究所で調べたところ、表面の数ミリの部分は劣化していましたがそれより内部のゴムはバージン状態が保たれていたそうです。現在作られている

積層ゴムの場合には、さらに外周を保護ゴムで巻いてあり、耐久性についてはほとんど心配ないということです。

また、火災から積層ゴムを守るため、ゴムの周辺は耐火被覆材で保護してあります。さらに大地震により免震装置の性能に問題が生じた際には各装置は新しいものに取り替えられる構造となっています。

この構造設計には当初より本学環境学研究科の福和伸夫教授の御協力・御指導をいただき、この地域（濃尾平野）の地域地盤特性を考慮した地震波で構造計算をしました。具体的には詳細な地盤調査を行い、この付近の地盤の卓越周期が3.5秒付近であることから、免震層の振動周期を地盤の卓越周期と一致しないようにできるだけ長くすることを目指しました。また、建築基準法告示による地震波だけでなく、名古屋市を対象に起こり得る地震動を想定した「愛知県設計用入力地震動研究協議会」（会長：福知保長名古屋工業大学名誉教授）により提案されている地震動、「想定新東海地震」、「想定濃尾平野西縁地震」、「想定伊勢湾地震」、「想定猿投山北地震」、「想定名古屋浅発直下地震」、により構造解析を行い安全性を確認し、免震構造の性能評価（大臣認定MNNN-0615）を取得しました。

今後はさらに、耐震性能確認および免震装置の保守管理のため、建物各所に地震計（強震計）を設置し、設計性能通りの耐震性能があるかの確認をするとともに、経年劣化や大地震後の耐震性能が低下していないかなどの検証も本学災害対策室で行う予定です。

（施設管理部）



大学院情報科学研究科情報システム学専攻博士課程前期課程2年
萩原 正人

I'm feeling lucky!



サンフランシスコで行われたインターン向けのイベントにて 左から2人目が筆者

「エキサイティングな」…月並みな言い方だが、この体験をこれ以上の確に表す言葉はないであろう。2005年8月から9月の2ヶ月間、アメリカのシリコンバレーにある Google の本社にてインターンシップ・プログラムに参加した。自分の専門分野と近いチームに配属され、そこでプロジェクトを通じて実際に研究やプロダクトの開発を行うという内容である。

インターンシップを通じて感じた研究との最も大きな違いは「モチベーションの高さ」である。学生が大学で取り組む普段の研究においては、上げた成果やそれに対する反応を実感することは非常に難しい。しかし、Google に代表されるような大規模な企業ともなれば、自分が開発に関わった製品は、文字通り何千万人という人々に使われ、直接「世界にインパクトを与える」ことになり得る。大学で身につけた技術が、そのまま社会のために役立っているというこの実感は、何物にも代え難い経験であり、これからの研究生活に対しても、技術面・精神面の両方において大変有益なものであった。

もちろん、苦労が無かったわけではない。非常

にフラットな組織であるため、例えば、研究・論文で名の通った、自分の専門分野の大家が隣の部屋に座っていて、意見を交換したり一緒に仕事をしたりする。ミーティングでは現在の問題に対して提言を求められ、良いアイデアは即実行となる。すなわち、立場としては他のエンジニアと区別なく扱われるため、「インターン＝研修生」という甘えは通用しない。このような緊張感のある関係が両者にとって良い効果を生み出しているであろう。

Google では「遊び心」を大切にしているということも印象的であった。社員が自分の勤務時間の一部を使って自由に開発してもよいという「20%ルール」は有名であるが、ここから生まれる遊び心が、創造的かつ高性能なサービス開発の原動力となっているのであろう。拡大すると穴だらけのチーズの画像が出てくる月の地図と、数十億ページを一瞬にして検索する高度な技術とは決して無関係ではない。このようなインターンシップは、同じ分野の優秀な技術者と共に過ごせ、大変刺激的な時間である。同じような機会があれば是非チャレンジしたいと考えている。

名古屋大学体育会会長表彰式を挙行



名古屋大学体育会は、12月6日（火）、豊田講堂第一会議室において、名古屋大学体育会会長表彰式を挙行しました。

この表彰は、本学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今年で17回を数えます。

今年は、11月29日（火）の体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」7名、「団体の部」8団体が、本学体育会会長の平野総長から表彰されました。

なお、受賞者及び受賞団体には、副賞として、名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。

■個人の部

運動部名	氏名	学部・学年	出場大会・成績
アーチェリー部	葛山 あい	情報文化学部・3年	2005年度東海学生アーチェリー個人選手権大会 女子 優勝
舞踏研究会	社本 学	理学部・4年	第32回中部日本学生競技ダンス選手権大会 モダン戦 優勝
ライフル射撃部	水野 祐輔	農学部・3年	第68回中部学生ライフル射撃選手権大会 10m ライフル立射60発競技 優勝
漕艇部	中村 良	経済学部・3年	第83回全日本選手権大会 男子舵手なしペア 8位
	北川 哲	工学部・4年	第83回全日本選手権大会 男子舵手なしペア 8位
ボクシング部	伊地知 大	工学部・2年	第44回中部学生ボクシング選手権大会 バンタム級 優勝
	堀 心一	医学部・1年	第44回中部学生ボクシング選手権大会 ライトウェルター級 優勝

■団体の部

運動部名	出場大会・成績
弓道部	第48回東海学生弓道選手権大会 男子団体 優勝
	第44回全国七大学総合体育大会 弓道女子 団体 3連覇
自動車部	2005年度全中部学生ダートトライアル選手権大会 優勝
ライフル射撃部	第34回中部学生ライフル射撃三姿勢大会 10m エアライフル3×20発競技 団体 優勝
航空部	第44回全国七大学総合体育大会 6連覇
	第45回全日本学生グライダー競技選手権大会 団体 5位
漕艇部	平成17年関西選手権競漕大会 男子舵手つきフォア 優勝
ボクシング部	第44回中部学生ボクシング選手権大会 団体 総合優勝
相撲部	第23回全国国公立大学対抗相撲大会 団体戦 優勝
陸上競技部	第44回全国七大学総合体育大会 陸上競技女子 4連覇

第42回須賀杯争奪駅伝競走大会を開催

名古屋大学体育会は、11月27日（日）、豊田工業高等専門学校学生会との共催で、第42回須賀杯争奪駅伝競走大会を開催しました。

この大会は、本学の元学生部長で、初代の豊田工業高等専門学校校長であった故須賀太郎先生が、両校のスポーツ振興に力を注がれる中で誕生したもので、両校の学生の自主

運営で行われている長い伝統と根強い人気のある駅伝大会です。

大会当日は晴天に恵まれ、本学から25チーム、豊田高専から24チームが出場し、やわらかい初冬の日差しの中、豊田高専から名古屋大学までの6区間計27.4kmで熱戦が繰り広げられました。



スタート直後、勢いよく走り出す選手達

順位	チーム名	団体名
1	アミチャン	豊田高専・陸上競技部
2	Super Sub A	名古屋大学・Super Sub
3	名大卓球部 A	名古屋大学・卓球部
4	負けチーム	名古屋大学・バドミントン部
5	恋する日本代表 ～ Broken Heat ～	名古屋大学・水泳部
6	Super Sub B	名古屋大学・Super Sub
7	えらにゃあ A	名古屋大学・トライアスロン部
8	Winbledon	豊田高専・硬式テニス部
9	名大卓球部 B	名古屋大学・卓球部
10	☆ Runner ☆	豊田高専・5C

(上位10チーム)

航空部が東海・関西学生グライダー競技会で 2年連続6度目の優勝

第25回東海・関西学生グライダー競技会（日本学生航空連盟・朝日新聞社主催）が、11月10日（木）から19日（土）まで、岐阜県海津市の木曾川滑空場で行われ、個人の部で、本学航空部の鈴木章充さん（工学部4年）が、また、団体の部でも、名古屋大学Aチーム（鈴木章充さん・西島

宏幸さん（工学部3年）が優勝を果たしました。本学航空部の優勝は、2年連続6度目です。

この大会は、11大学の9チーム22名が参加して、各選手が1日に数回飛行し、14.1kmの周回コースで速度や滞空時間などを競う形で行われ、名古屋大学Aチームは、最終日に記録を伸ばし、1,500点以上あった得点差を逆転し、見事優勝しました。

なお、名古屋大学Aチームを含む上位7チームが、平成18年3月に埼玉県熊谷市の妻沼滑空場で開催される全日本学生グライダー選手権大会に出場します。



優勝旗を授与される名古屋大学Aチーム（鈴木・西島組）

東海学生駅伝で63年ぶりに優勝

第67回東海学生駅伝競走大会が、12月4日（日）、愛知県武豊町の記念緑地公園から半田市の半田運動公園陸上競技場までの7区間63.7kmのコースで、19チーム（オープン参加4チームを含む）が参加して行われ、名古屋大学Aチームが優勝しました。これは、昭和17年に本学の前身である名古屋高等商業学校が優勝して以来、63年ぶり2度目の快挙です。なお、今回の優勝により、今年の体育の日に行われる第18回出雲全日本大学選抜駅伝競走への出場権を獲得しました。

大会当日は、雨が降るあいにくの天候となりましたが、名古屋大学Aチームは、1、2区で区間賞を取るなど、5区までトップに立つ快走をみせました。6区で四日市大学に抜かれ、14秒差を付けられたものの、最終7区の3km手前で同大に追いつき、最後は、トラック勝負を見事に制して優勝しました。

なお、本学陸上競技部は、11月20日（日）に行われた第52回中山道東濃駅伝の一般Aでも優勝するなど、めざましい活躍をみせており、今後の更なる活躍が期待されます。

一優勝して一

優勝が決まってから、様々な人から「おめでとう」、「応援してたよ」等の言葉を頂きました。こんなにもたくさんの人々に期待され、支えられているんだと、改めて実感しています。

出雲は今年10月。まだまだ時間があります。全国で戦える実力を身につけるため、これまで通り練習を積み重ねていきます。期待してください。

（陸上競技部主将 本田将浩 [4区走者]）



1区スタート付近 右から2人目が区間賞を取った内藤選手



2区で区間賞を取った中村選手



7区半田運動公園に入った直後 先頭を追い抜いた伊藤選手



表彰式・インタビューを終えた選手達と金尾監督

	1区 8.5km	2区 10.6km	3区 8.1km	4区 8.3km	5区 10.3km	6区 9.3km	7区 8.6km
名古屋大学A 3:20:29	内藤 聖貴 (理 D2) (1) 25:51 (1) 25:51	中村 高洋 (工4) (1) 57:19 (1) 31:28	稲垣真太郎 (情 M2) (1) 1:22:49 (2) 25:30	本田 将浩 (経3) (1) 1:49:56 (4) 27:07	藤永 紘基 (工2) (1) 2:22:52 (3) 32:56	小泉 健二 (理3) (2) 2:52:40 (2) 29:48	伊藤 潤一 (農 M2) (1) 3:20:29 (2) 27:49

順位	大学名	記録
1	名古屋大学A	3:20:29
2	四日市大学	3:20:30
3	愛知工業大学A	3:21:50
4	中京大学 A	3:22:42
5	名古屋商科大学	3:28:14
6	静岡大学	3:28:24
7	中京学院大学	3:28:32
8	名城大学	3:31:35
9	愛知大学	3:32:55
10	愛知教育大学	3:34:21
11	名古屋工業大学	3:37:15
12	岐阜大学	3:38:06
13	三重大学	3:44:03
14	南山大学	3:48:20
15	日本福祉大学	3:52:20
OP	愛知工業大学B	3:27:43
OP	東海学連選抜	3:27:45
OP	中京大学B	3:29:49
OP	名古屋大学B	3:31:36

ボクシング部練習場が完成



新しいリングで熱気あふれる公開練習を披露するボクシング部員

ボクシング部練習場が、11月に東山キャンパスの第一体育館北側に完成し、そのお披露目式が、11月19日（土）、平野総長、若尾理事（教育担当）をはじめ、ボクシング部員・OB等関係者約50名の出席の下、行われました。

この建物は、鉄骨造1階建て92.5㎡で、サンドバッグ等が取り付けられるように、鉄骨補強が施されており、内部には、5メートル四方のリングや、シャドーボクシングには欠かせない姿見鏡等も設置されています。

ボクシング部は、これまで中京大学ボクシング部の練習場を間借りするなどし、学外で練習をしてきましたが、今年度の中部学生ボクシング選手権大会で、団体優勝、2階級で優勝するなどの好成績を修めてきました。学内に練習場ができたことにより、一層練習に取り組める環境が整い、今後の大会での更なる活躍が期待されます。



談笑する（左から）岩尾ボクシング部OB、平野総長、水谷中京大学教授、若尾理事

—練習場完成に寄せて—

私たちボクシング部員は今、真新しい練習場で今まで以上に熱心に練習しています。

今後の目標は、個々のレベルアップはもちろん、部としてのチーム力を高めることです。ボクシングは決して個人競技ではありません。もちろんリングの上では相手と1対1ですが、そこで戦うことができるのはセコンドや応援してくれる人達がいるからであり、さらに言えば、共に競い合い励まし合える仲間と練習してきたからこそ、自信を持ってリングに上がることができるのです。

練習場建設には本当に多くの方々にご尽力いただきました。ボクシング部の諸先輩方をはじめ皆様への感謝の気持ちを忘れず、さらに上を目指して一生懸命頑張ります。また、それだけではなく、練習場を有意義に活用していくことも考えています。

部員も大募集中ですので、少しでも興味のある方は一度見学に来てください。活動時間は月・水・金曜日の17時～19時と土曜日の10時～12時です。お待ちしております。

（ボクシング部主務 榊原弘子 [文学部3年]）

フライブルク大学における名古屋大学ビジネス訴訟研究所を設置

●大学院法学研究科



歓談する（右から）平野総長、佐分法学研究科長、イエーガー学長、
ヴォスクーレ法学部長

大学院法学研究科は、11月25日（金）、ドイツのフライブルク・イン・ブライスガウ市に、「フライブルク大学における名古屋大学ビジネス訴訟研究所」を設置するとともに、同研究所の開所記念式典を開催しました。

この研究所は、科学研究費補助金（学術創成研究費）「国際的ビジネス紛争の法的解決の実効性を高めるための新たなフレームワークの構築」を遂行するため、ヨーロッパにおける法情報の研究拠点として、同市内に借り上げた事務所（2階建ての2階部分、260㎡）に設置されたものです。市場経済の世界的な広がりに伴い増加している国際的ビジネス訴訟には、外国の法情報の獲得が不可欠ですが、現在は、このための手段、特に、アクチュアルな法情報獲得の方法は確立されておらず、各国が抱える根本問題となっています。こうした現状を打開するため、同研究所を設置し、主要国の法専門家による人的ネットワークを構築すること

で、ビジネス紛争の解決に必要な法情報を交換・共有し、研究・分析するための新たな国際的フレームワークの構築と新たな法学の方法の確立を目指します。

同研究所が設置されたフライブルク大学は、1457年にオーストリアの大学として創立され、現在は、ドイツ有数の総合大学の一つとなっています。本学とフライブルク大学は、1972年に経済学部、2000年に医学部が部局間協定を、さらに、2001年には大学間協定を締結するとともに、教員や学生の交流、共同研究及びシンポジウムの開催を行ってきました。

開所式には、本学から、平野総長、佐分法学研究科長、研究代表者の河野正憲法学研究科教授等、フライブルク大学から、イエーガー学長、ヴォスクーレ法学部長、シュトゥルナー教授等関係者20名が出席し、研究所の開設を祝いました。



事務所を見学する平野総長ら



あいさつする（左から）平野総長、イエーガー学長

映像インスタレーションとパフォーマンス「cycling」公演が行われる – 半年間にわたる学生参加プロジェクト –

●情報文化学部



インターメディア・パフォーマンス「cycling」(撮影：村上将城)

映像と大規模な装置を使ったインターメディア・パフォーマンス「cycling (サイクリング)」の公演が、12月3日(土)、4日(日)の2日間、午後7時より、全学教育棟A館西側の空地で行われました。

これは、秋庭史典情報科学研究科助教授を代表とする情報文化学部の教育研究改革・改善プロジェクト「デジタル映像資料を使った新たな文理融合型教育創出のための調査研究」の一環として開催されたもので、全体の企画と運営には、秋庭助教授、茂登山清文情報科学研究科助教授、教養教育院で「表象芸術論」を担当する伏木 啓名古屋学芸大学助手があたりました。また、作品は、アーティストとして活動する伏木助手と井垣理史名古屋学芸大学助手、パフォーマーの高木理恵氏と山田珠実氏に加え、情報文化学部の学生4名と大学院情報科学研究科の院生1名、名古屋学芸大学メディア造形学部の学生5名が制作しました。

情報文化学部では、前期の「マルチメディア」(安田孝美情報科学研究科教授・茂登山助教授)でコンピュータグラフィックスや映像制作を行っており、今回もその受講者が参加しています。6月に最初にメンバーが集ってから、今回のパフォーマンスまで、毎週1、2回ミーティングを重ね、作品のコンセプトやアイデアを議論し、会場も10日

ほどかけて設営しました。10名の学生は、その間ずっと参加し、会場で流れた映像のほとんども学生たちによるものです。

当日は、寒波が近づいていて、大変冷え込んでいましたが、佐野情報文化学部長はじめとする教職員や学生、また、学外からも多くの来場者がありました。

パフォーマンスは、円形状に配置された全長63.9メートル、高さ3メートルのスクリーンの中で行われました。その上に、映像がゆっくりと反時計回りに回転しながら映され、出演者たちが順に「記憶」を語り、観客もスクリーンの内側に置かれた回転椅子に腰かけ、映像やパフォーマーと観客の影を身体をねじりながら見ます。40分間の上演の全体は、即興も含め細部に至るまで制御されており、過去の記憶と現在の想起とが交錯する不可思議な時と空間に、見る者は自身の記憶を呼び覚まししながら、取り込まれていくようでした。

参加した学生たちは、自分たちの体験を感動をもって語り、来場者からも「よかった」、「このような企画に参加したい」とのアンケート回答が多く寄せられました。

同プロジェクトでは他に、授業での映像の活用、教育のための映像資料の収集あるいは愛知万博での映像活用等についての調査研究が行われています。これらは、今回のパフォーマンスの記録上映も含め、公開レクチャーとして、2月28日(火)午後1時より、IB電子情報館で披露される予定です。



インターメディア・パフォーマンス「cycling」(撮影：村上将城)

ドイツ化学産業におけるイノベーションを開催

●大学院理学研究科・物質科学国際研究センター



基調講演を行う野依特別教授

ドイツ化学産業におけるイノベーション (CHEMISTRY. ELEMENTS OF LIFE) が、11月9日 (水)、野依記念学術交流館において、「日本におけるドイツ年」の行事として、在日ドイツ商工会議所主催、本学等の共催により開催されました。

このシンポジウムは、化学の最前線で活躍する研究者や学生を対象に、ドイツの大手化学企業各社が共同で最新の研究成果と革新的技術を紹介するもので、本学の他、東京大学と大阪大学でも開催されました。当日は、化学系の教職員や学生を中心に約300名の参加があり、立ち見が出るほどの盛況となるとともに、ドイツ研究協会 (DFG) とミュンスター大学から来日中の16名も参加するなど、「日本におけるドイツ年」に相応しいシンポジウムとなりました。

シンポジウムでは、ドイツを紹介するビデオの上映の後、在日ドイツ商工会議所のマンフレット・ホフマン専務理事と平野総長からあいさつがあり、平野総長は、本学が「世界の地域社会への掛け橋となるべく」活発に行っ

ている国際共同活動の状況とドイツ研究機関との緊密な関係を紹介しました。続いて、マックス・プランク石炭研究所長のフェルディ・シュート教授が、「Room for Function - 多孔性固体の設計」と題して基調講演を行い、多孔性固体に関する先端的研究成果の概説とドイツにおける大学・研究機関・産業界の連携組織について紹介しました。また、野依良治特別教授による基調講演「未来世代のための科学と技術」では、科学研究を「果てしなく続く知の旅」と位置付け、持続的文明社会を築くための化学合成研究、とりわけ「グリーンケミストリー」の重要性と化学者の責務を格調高く論じられました。コーヒープレイク後には、バイエル(株)、メルク(株)、デグサジャパン(株)、ランクセス(株)、BASF ジャパン(株)の5社による企業プレゼンテーションが行われました。

午後は、異物質科学国際研究センター長による「日独共同大学院-化学教育研究におけるミュンスター大学と名古屋大学の連携-」と題する講演、ナノテクノロジー、分析科学、受託研究及びバイオテクノロジー各分野におけるドイツ各社の取り組みと研究成果に関する講演が行われました。また、講演と平行して、ドイツの化学企業各社が展示ブースを設け、積極的に会社と研究活動の紹介を行うとともに、教職員や学生の質問に丁寧に答えていました。シンポジウム終了後に行われたレセプションでは、ドイツビールが振る舞われるなど、参加者にとってドイツやドイツの化学を知るまたとない機会となりました。



展示ブースの様子

第21回国際生物学賞記念シンポジウムを開催

●大学院理学研究科

第21回国際生物学賞記念シンポジウム「生物の形と分子」が、11月30日（水）と12月1日（木）の2日間、野依記念学术交流館において開催されました。

このシンポジウムは、Nam-Hai Chua 米国ロックフェラー大学教授が今年度の国際生物学賞を受賞することを記念して、日本学術振興会からの委託により開催されたもので、270名以上の参加がありました。国際生物学賞は、昭和天皇の御在位60年と長年にわたる生物学に対する御研究を記念して設けられたもので、「生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、学術の進歩に大きな貢献をした研究者」に授与されます。今年の授賞分野には、形態形成が含まれており、Chua 教授の植物の形作りにおける遺伝子の発現や作用に関する基礎的・先駆的な業績が評価され、今回の受賞となりました。

シンポジウムでは、初めに、平野総長及び井上博充日本学術振興会監事から祝辞があり、平野総長は、Chua 研



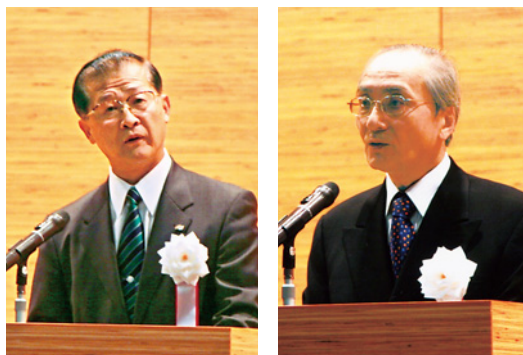
講演する Chua 米国ロックフェラー大学教授

究室には今までに7名の本学出身者が留学し、現在日本各地で活躍していることに触れ、若手研究者育成に対する Chua 教授の貢献に敬意を表しました。続いて、Chua 教授の友人であり、siRNA の発見者である David Baulcombe 博士など31名（海外11名、国内20名）の招待研究者が、生物の形態形成や胚発生に関する先端的な研究成果を発表し、最後に、Chua 教授が、「根の形態形成におけるユビキチン化とマイクロ RNA によるオーキシシグナルの制御」と題して記念講演を行いました。Chua 教授は、植物の形作りや発生においては、低分子 RNA による遺伝子の転写後調節とタンパク質の安定性が特に重要であると話し、満員の聴衆は熱心に耳を傾けていました。

なお、Chua 教授は、12月5日（月）、東京の日本学士院において、天皇、皇后両陛下の御臨席の下、国際生物学賞を授与されました。



参加者による記念撮影



祝辞を述べる（左から）平野総長、井上日本学術振興会監事

平成17年度鶴舞公開講座を開催 —今が旬、メタボリック症候群てなに？—

●医学部



公開講座の様子

医学部は、12月10日（土）、医学部講義室において、「今が旬、メタボリック症候群てなに？」をテーマに、平成17年度鶴舞公開講座を開催しました。

最近、社会的な関心の高い「メタボリック症候群」は、肥満体型の人に、高血圧、糖尿病、高脂血症という複数のリスクが複合した状態で、心筋梗塞や脳梗塞等の重大な疾患を引き起こす可能性もあり、現在、40歳以上の約20%が同症候群に該当しています。今年度は、同症候群の病態を知り、その予防の必要性について理解を深めてもらうため、このテーマを取り上げました。

講座では、井口附属病院長による「老いとメタボリック症候群」、室原豊明医学系研究科教授による「高血圧と動脈硬化」、大磯ユタカ同研究科教授による「おいしく食べても病気の？糖尿病」及び豊嶋英明同研究科教授による「健康社会を目指して：肥満大敵」と題する講義が行われ、受講した120名の行政・医療関係者や一般市民は熱心に聴講していました。

附属農場・動物塚で動物慰霊祭を実施

●大学院生命農学研究科



参列者による献花の様子

平成17年度動物慰霊祭が、11月30日（水）、大学院生命農学研究科附属農場の動物塚において、教職員、大学院学生、学部学生など約100名の出席の下、実施されました。

この慰霊祭は、昭和50年12月10日に、当時の農場長の宗像 桂農学部教授の尽力で附属農場に建立された動物塚で初めて執り行われて以来、毎年12月10日前後に実施されているものです。

式典では、大学院生命農学研究科を代表して、山内副研究科長から、動物慰霊祭の歴史と教育・研究に供された多くの動物に対し感謝の意が述べられた後、各層の代表による供穀の儀及び献花の儀が執り行われました。続いて、出席者全員による献花が行われ、最後に、動物実験委員会委員長の福田勝洋同研究科教授から教育・研究のために今年度供された動物に対し慰霊の言葉がありました。

第7回まちとすまいの集いを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科都市環境学専攻建築学教室は、11月26日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、「世界に開いた窓と名古屋のまちづくり」と題して、第7回まちとすまいの集いを開催しました。

この会は、私たちが住む「まちとすまい」について語りあうために、毎年開催されているもので、今年も、中部国際空港の開港、愛・地球博の開催など、名古屋の世界への窓が大きく開かれたことを受けて、世界に開いた名古屋の今後を考えることにし、市民や近隣の大学で建築を学ぶ学生、建築技術者など、91名の参加がありました。

会では、まちのあり方を探求する片木 篤同研究科教授、大空間建築を手がける大森博司同研究科教授、まちの環境

を考える久野 覚同研究科教授が、空港や万博を振り返りながら「名古屋」論を語りました。続いて、パネルディスカッションが、有賀 隆同研究科助教授を中心に行われ、パネリストから様々な角度での「名古屋」論が展開され、これからの名古屋を垣間見ることができました。



パネルディスカッションの様子

情報科学研究科が基盤研究公開セミナーを開催

大学院情報科学研究科は、12月9日（金）、IB 電子情報館東棟大講義室において、基盤研究公開セミナーを開催しました。

このセミナーは、設立3年目を迎えた同研究科の教育研究活動を広く一般の方々に紹介することを目的として開催されたもので、「コンピュータの挑戦」を全体テーマとして、3名の同研究科教員による講演が行われ、100名を超える



講演する有田情報科学研究科教員

参加がありました。

セミナーでは、初めに、複雑系科学専攻の有田隆也教授による「複雑系科学の冒険：コンピュータ内で心を進化させるか？」と題する講演が行われ、「心の理論」や複雑系科学の手法等の基礎事項が解説された後、同手法に基づいて、他者の心理を読み取って行動することのメリット・デメリットを解析した最近の研究成果が紹介されました。続いて行われた計算機数理論科学専攻の酒井正彦教授による「プログラミングの歴史と展望」と題する講演では、コンピュータの発明以降、様々なプログラミング言語が設計されており、新しい言語の開発は現在でも続いていると説明がありました。やや異色な例として、「難読言語」が紹介され、これは、読み書きが非常に難しいプログラミング言語で、昨今話題になっているプログラムの不正改ざんの防止に有効であろうとのことでした。最後に、社会システム情報学専攻の横井茂樹教授による「映像技術の発展と社会」と題する講演が行われ、一時期低迷していた映画産業が復興した背景には、コンピュータ・グラフィックス技術の飛躍的な発達があったこと、同技術の応用分野は大きく広がっており、更なる発展が望まれること等が話されました。

シンポジウム「ITとマイクログリッドの融合」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所エネルギーシステム（中部電力）寄附研究部門は、11月22日（火）、野依記念学術交流館において、エコトピア科学シンポジウム「ITとマイクログリッドの融合－構想・実証試験－」を開催しました。

このシンポジウムは、将来の最適エネルギーシステムの構築を目指した研究開発の最新動向を広く社会に知ってもらうことを目的として、毎年開催されているもので、今回



シンポジウムの様子

は160名ほどの参加がありました。

地球環境の維持、エネルギー供給源多様化等のため、再生可能エネルギーを利用した電源の普及が期待されていますが、これらの多くは発電量の変動等の問題があります。この問題を解決する手段として、電力貯蔵装置等と組合せ、効率的な需給制御を行い、連系する電力系統への影響を小さくできるマイクログリッドが注目されており、最近では、IT技術を融合させることで、より効率的な需給調整を目指す動きがあります。

シンポジウムでは、高井同研究所副所長のあいさつ及び遠藤奎将同研究所客員教授の趣旨説明の後、鈴置保雄工学研究科教授による「分散電源の導入拡大とマイクログリッド」、中部電力の田中 雅氏による「愛・地球博における新エネルギー等地域集中実証研究」、三菱電機の合田忠宏氏による「IT技術を用いたマイクログリッドのエネルギー制御」、電力中央研究所の田中和幸氏による「需要地ネットワークの研究」、茨城大学の奈良宏一氏による「FRIENDSとIT技術」と題する講演が行われ、IT技術の有効性やマイクログリッドの技術的課題についての議論が交わされました。

環境医学国際シンポジウムを開催

●環境医学研究所

環境医学研究所は、11月30日（水）、シンポジオンホールにおいて、名古屋大学万博記念国際フォーラム・サテライトシンポジウムとして、環境医学国際シンポジウム「環境への生体適応への分子細胞機構」を開催しました。

このシンポジウムは、環境変化と健康の問題を、生命と脳機能の維持、健全な次世代の育成及び生活の質（QOL）の確保の面から捉え、討論することを目的として開催されたもので、関係者を含め、100名を超える参加がありました。

シンポジウムでは、平野総長及び児玉同研究所長から開会のあいさつがあった後、「発生異常」、「心臓のストレス応答」及び「脳・神経機能の発達・維持とその障害」をテーマとする3つのセッションに分かれ、海外からの招待講演者（ボイエット マンチェスター大学教授、サンギユネ ユタ大学教授、オプトホフ ユトレヒト大学教授、クレアー ベイラー大学助教授、キャラウェイ ソーク研究

所准教授）と同研究所教員計10名が、約6時間にわたり、糖尿病合併妊娠に伴う先天奇形とコレステロール合成障害による皮膚発生異常、気象変化による疼痛憎悪、脳特異的薬物導入法等についての研究成果を発表するとともに、活発な討論を行いました。

また、ロビーでは、各分野の研究内容を紹介したポスター等の展示が行われ、熱心に見入る参加者の姿が多く見られました。

環境医学研究所が外部懇話会を開催

第5回環境医学研究所外部懇話会が、11月30日（水）、環境医学国際シンポジウムに引き続き、グリーンサロン東山ミーティングルームにおいて開催されました。

この懇話会は、同研究所の充実・発展のため、研究所外部の有識者から、教育・研究活動、社会連携、国際交流等について評価・助言を受けるもので、平成8年度以降4回

開催されています。5回目となる今回は、法人化後、初めて開催され、イギリス、オランダ、アメリカ等の大学・研究所からの8名の国外委員（国際シンポジウムに参加した3名を含む）と、学内、国立大学附置研究所、近隣の大学共同利用機関、私立大学等からの9名の国内委員の計17名で構成されています。

懇話会では、村田副研究所長による同研究所の現況報告及び中期目標・中期計画・年度計画の説明に続いて、児玉研究所長から、過去3年間の主な出来事の報告、前回の外部懇話会での提言とそれに対する同研究所の対応等についての説明がありました。これを受け、各委員から様々な評価・提言が出され、予定時間を大幅に超える活発な意見交換が行われました。委員から出された評価・提言は、同研究所のミッション、組織整備、研究資金の確保、若手研究者の育成、研究活動の質的向上、国際化、広報活動の充実等多岐にわたり、特に、研究論文発表やマネジメントに関しては、厳しい意見だけでなく、激励のことも寄せられるなど、今後の同研究所の方向性に対し、示唆に富む会となりました。



研究所からの説明を受ける外部評価委員

「館長と話そう! 2005」を開催

●附属図書館



伊藤附属図書館長と懇談する学生利用者

附属図書館は、12月12日（月）、平成15年から毎年行っている学部学生、大学院学生の利用者と附属図書館長との懇談会「館長と話そう! 2005」を開催し、学部学生3名、大学院学生3名の計6名が応募により参加しました。

茶話会形式で行われた懇談会では、参加者から、複写機、研究個室、視聴覚ブース、閲覧机、雑誌架、留学生用の資料、情報検索に使うマガジンプラス等の図書館の利用について、利用者の目から見た要望が出され、これを受け、伊藤附属図書館長からの詳細な説明があり、活発な意見交換が行われました。また、参加者から、トイレが改修されたこと、照明が明るくなったことのほか、夏休み等の開館時間が長くなり助かっているなどの好意的な感想も出されました。

なお、附属図書館では、今後も、利用者の意見を直接図書館長が聞く機会を設けていく予定です。

ICCAE2005年度 第5回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



オープンセミナーの様子

農学国際教育協力研究センターは、11月21日（月）、2005年度第5回オープンセミナーを開催し、4名のアフリカ人研究者が、「国連大学アグリカルチャー・フォー・ピース・プロジェクト」の研究成果を発表しました。

このプロジェクトは、アフリカ・サブサハラに焦点をあて、農業開発が、戦争と平和が係わっている社会経済発展に、如何に影響するかを研究することを目的にしています。

セミナーでは、スーダン・ジュバ大学のブタイナエルナイエン助教授が、農村地域における内戦と生活破壊について、ベニン・国立農業研究所のエビファン ソジウ研究員が、遊牧民と農民の間の土地を巡る紛争について、ナイジェリア・アバオクタ農業大学のエニオラ ファツソロ講師が、遊牧民間の紛争について、スワジランド・農業協同省のアジョラ アプサ農業経済研究員が、食糧援助が農業生産に及ぼす影響について報告した後、出席した大学院学生、留学生を交えて、活発な討議が行われました。

博物館新着標本コーナーで蔵書票を 展示



新着標本コーナーで蔵書票に見入る来館者

博物館は、11月23日（水）から27日（日）まで、「18世紀の紋章蔵書票 オルリックの蔵書票－榎田直人コレクションから」を新着標本コーナーで展示しました。

この企画は、今年4月に東京都の榎田直人氏から博物館に寄贈された約9,000点に及ぶ世界の蔵書票のごく一端を紹介したものです。蔵書票（Exlibris, book plates）とは、書物に貼付してその所有者を示す紙片で、メッセージを込めた美しい絵柄の紙片は「紙の宝石」とも呼ばれ、人々を魅了しています。27日には、「第6回全日本蔵書票フェスタ・イン名古屋」のエクスカージョンとして、20名の方々が博物館を訪れ、展示に見入っていました。

なお、博物館では、大学院国際開発研究科や大学院国際言語文化研究科の関係教員（博物館研究協力者）とともに、総長裁量経費により、同コレクションの整理と画像データベース化及び図像学的研究を行っています。

第7回博物館企画展等を開催

－トリ 酉 鶏 名大のニワトリ学：解剖学図と標本－



企画展

第7回博物館企画展「トリ 酉 鶏 名大のニワトリ学：解剖学図と標本」が、11月2日（水）から12月16日（月）まで開催されました。

これは、保田幹男名誉教授による「家鶏・野鶏解剖学図説」（東大出版会、2002年）の原画が平成14年に博物館に寄贈されたのを受けて企画されたもので、保田名誉教授の恩師で、本学の初代農学部長を務め、「名大のニワトリ学」の基礎を築いた増井 清の世界的業績であるヒヨコの雌雄鑑別法や、本学のニワトリ学に関係する標本、資料等が展示されています。また、企画展をきっかけに、昭和11年に制作された雌雄鑑別法のサイレント映画フィルム（35ミリ版）が発見され、畜産技術協会から博物館に寄贈されました。この映画は、増井自身によるヒヨコの雌雄鑑別の学理の紹介、鑑別師の養成風景、当時の養鶏方法等が鮮明に記録された貴重な資料で、DVDとして復刻し、会期後半に上映されました。

企画展に関連して、第47回博物館特別講演会「特別天然記念物 土佐のオナガドリ－愛玩から遺伝子資源まで－」

が、12月2日（金）、都築政起広島大学教授を講師に招き、開催され、学内外から約50名の参加がありました。講演で、都築教授は、オナガドリが江戸時代に作出された観賞用品種の一つで、土佐で愛玩用に飼われていたこと、オナガドリの種類や飼育方法、遺伝子レベルでの研究成果について話すとともに、シャモやチャボ等の日本鶏について、自らが撮影した美しい写真を使って紹介しました。

また、12月15日（木）には、第13回博物館コンサート（NUMCo）「尺八の歴史－尺八・箏の演奏を添えて－」が行われました。尺八奏者の飯田勝利さん（琴古流）は、1000年以上にわたる尺八音楽の栄枯盛衰の歴史をわかりやすく解説するとともに、持参した様々な尺八を見せて、サイズや穴の数等の特徴を解説しながら演奏しました。また、「本調」等の代表的な尺八の古本曲に加え、「Amazing Grace」や現代音楽、箏奏者の筒井詠子（生田流）さんとの箏・尺八の二重奏による「六段の調」等が演奏され、約80名の聴衆は深みのある尺八の音色と箏・尺八の絶妙なハーモニーに酔いしれていました。



コンサート



特別講演会

博物館が秋の体験実習を開催

博物館は、秋の体験実習として、11月19日（土）に、「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」を、20日（日）には、「名大の野鳥を見つけよう」を開催しました。

19日に博物館野外観察園で行われた「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」は、日本学術振興会が推進している大学の研究成果の一端を中学生・高校生に紹介する「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一つとして開催されたもので、ノーベル化学賞受賞者の白川英樹筑波大学名誉教授が、日本学術振興会の委員として出席し、39名の小学生・中学生・高校生は、白川先生と一緒に、ドングリの自然史やドングリの利用法を学びました。

当日は、平野総長及び白川先生のあいさつの後、ドングリのなる樹木やドングリの実の内部を観察するとともに、ドングリの実と樹木の関係等を学びました。参加者は、大きな樹木には約2万個のドングリがなるが、大部分は動物に食べられてしまい、約1%しか残らない等の興味深い話を熱心に聞いていました。午後からは、観察園セミナーハ



白川筑波大学名誉教授と参加者

ウスで、縄文人が食べていたドングリ団子を作りました。実際に、北海道の縄文遺跡から出土した石器を使って、乾燥したドングリを砕いて殻を取り、粉にした後、少量のひき肉や卵を混ぜてダンゴ状にして茹でたものを試食しました。ドングリ団子には石の粉も混じっていて、食べるとジャリジャリし、このようなものを食べていたため、出土する縄文人の歯は磨り減っていたとの説明に、参加者は納得していました。体験実習終了後には、白川先生から、参加者全員に修了証として、「未来博士号」が手渡されました。

20日の「名大の野鳥を見つけよう」には、小学5年生から高校2年生までの10名が参加し、最初に、講師の大畑孝二さん（日本野鳥の会）から双眼鏡の使い方を教わり、キャンパスの野鳥探しに出かけました。豊田講堂の裏手で、身近なカラス、ハト、スズメ、ヒヨドリを探しながら、野鳥の説明を受けた後、鏡ヶ池周辺で、コサギ、カイツブリを双眼鏡とフィールドスコープで観察し、幸運にも、キセキレイを見つけることができました。その後、セミナーハウスで、野鳥のための巣箱と餌台を作りました。参加者は初めての巣箱作りに慣れない手つきで挑戦していましたが、全員が作り上げ、巣箱の一部と餌台を野外観察園に設置し、半日の体験実習は終了しました。



豊田講堂周辺で野鳥観察をする参加者

9.16 モンゴル国立大学法学部長等

Sodovsuren Narangerel モンゴル国立大学法学部長、同夫人、Nanzaddorj Lundendorj 同大学法学部副学部長、同夫人、Shairai Batsukh モンゴル国土
地管理局長、Altangerel Dorjgotov 同国最高裁判所判事、Jugnee Amarsanaa
モンゴル国立法律センター長、Batbold Amarsanaa 同大学法学部助教授が訪
問され、大学院法学研究科がモンゴル国立大学に設置予定の日本法教育研
究センターを中心に、同研究科とのこれまでの交流経緯・実績等について懇
談するとともに、これらの実績を基に、本学との大学間学術交流協定締結に
向けての意見交換が行われました。なお、一行は、9月17日の Sodovsuren
Narangerel 氏に対する名誉博士号の授与式出席に併せて表敬訪問されたも
のです。



9.20 タシケント国立法科大学長等

Rustambaev Mirsoyusup タシケント国立法科大学長、Yusupov Dilishod
同大学副学長、Ikramov Muzraf ウズベキスタン共和国司法省立法局長及び
Avezov Khabibulla 同省大臣補佐官が訪問され、大学院法学研究科がタシケ
ント国立法科大学に設置した日本法教育研究センターを中心に、本学との学
術交流推進について意見交換が行われました。



10. 5 大連理工大学校務委員会主任（理事長）等

林安西大連理工大学校務委員会主任（理事長）、李成恩同大学弁公室主任
（事務局長）、趙勝川同大学国際協力交流処処長、曲景平同大学化工学院院長
及び党延忠同大学システム工学研究所所長が訪問され、本学との大学間学術
交流協定締結の可能性を含めた今後の学術交流推進等について懇談が行われ
ました。



10.22 UCLA カリフォルニアナノシステム研究所副所長等

Leonard Rome UCLAカリフォルニアナノシステム研究所副所長、Carlo
Montemagno 同研究所副所長及び David Lundberg 同研究所戦略的連携担
当部長が訪問され、本学との学術交流の現状と協定締結に向けての交流促進
について懇談が行われました。

10.28 サンティアゴ大学長

Ubaldo Zuniga Quintanilla サンティアゴ大学長が訪問され、これまでの大
学院理学研究科を中心とした本学との学術交流についての実情と今後の交流
促進について懇談が行われました。



11.17 南京大学長江三角州経済社会発展研究センター執行センター長等

劉志彪南京大学長江三角州経済社会発展研究センター執行センター長（南
京大学商学院教授）、鄭江淮同センター研究員（同大学商学院教授）及び李
曉春同センター研究員（同大学商学院助教授）が訪問され、大学院経済学研
究科との共同研究等の交流実績を中心に、今後の相互理解と交流促進につい
て懇談が行われました。

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17. 6. 7	モレキュラー・キラリティーアワード2005	大学院工学研究科教授	八島 栄次	
H17. 7.22	第51回高分子研究発表会 ヤングサイエンティスト講演賞	大学院工学研究科講師	前田 勝浩	
H17. 9. 7	2005年度日本液晶学会 論文賞	大学院工学研究科教授	関 隆広	
H17. 9.28	日本金属学会 論文賞	大学院工学研究科助教授	岩井 一彦	浅井滋生（大学院工学研究科教授）と連名
H17.10.16	国際宇宙航行アカデミー（IAA）会員	太陽地球環境研究所教授	上出 洋介	
H17.10.23	PASREG学会 PASREG AWARD of EXCELLENCE 賞	大学院工学研究科助教授	生田 博志	
H17.10.24	中国国際高機能セラミックス会議 中国珪酸塩学会賞	大学院工学研究科教授	河本 邦仁	
H17.10.24	「SEC journal」創刊記念論文優秀賞	情報連携基盤センター研究員	山本 雅基	阿草清滋（大学院情報科学研究科教授）他6名と連名
H17.10.28	第10回高分子分析検討会 ポスター賞	エコトピア科学研究所助手	石田 康行	杉本憲明（大学院工学研究科M2）、清水裕太（工学部4年）、長谷川達也（エコトピア科学研究所教授）、北川邦行（エコトピア科学研究所教授）と連名
H17.11. 2	米国化学工学協会 2005年度 Fluor Daniel Lectureship Award	先端技術共同研究センター教授	森 滋勝	
H17.11. 5	日本機械学会 材料力学部門 功績賞	大学院工学研究科教授	田中 啓介	
H17.11. 9	MHS2005 Best Paper Award	大学院工学研究科教授	社本 英二	鈴木教和（大学院工学研究科助手）、樋野励（大学院工学研究科講師）、土屋英滋（大学院工学研究科M2）他3名と連名
H17.11.18	第3回東アジア超伝導エレクトロニクスシンポジウム ポスター賞	大学院工学研究科講師	井上 真澄	西谷 崇（大学院工学研究科M2）、澤木弘二（全学技術センター）、藤巻 朗（大学院工学研究科教授）他3名と連名
H17.11.24	日本放射線安全管理学会 平成16年度最優秀論文賞	アイソトープ総合センター助手	伊藤 茂樹	西澤邦秀（アイソトープ総合センター教授）、佐瀬卓也（徳島大学アイソトープ総合センター講師）と連名
H17.12. 6	平成17年度日本燃焼学会 奨励賞	大学院工学研究科助教授	山本 和弘	
H17.12. 6	日本結晶学会 進歩賞	大学院工学研究科助教授	西堀 英治	
H17.12.15	日本化学学会 BCSJ 賞	大学院工学研究科助手	山口 毅	香田 忍（大学院工学研究科教授）、松岡辰郎（大学院工学研究科助教授）他1名と連名

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17. 6. 8	モレキュラー・キラリティー優秀発表賞	大学院工学研究科M2	永井 寛嗣	
H17. 8. 5	応用物理学会プラズマエレクトロニクス分科会サマースクール 優秀ポスター賞	大学院工学研究科M1	岡安 隆文	
H17.10.11	地球電磁気・地球惑星圏学会 学生発表賞	大学院理学研究科D2	小竹 論季	
H17.10.28	平成17年度ソノケミストリー討論会 ポスター部門 ソノケミストリー進歩賞	大学院工学研究科M1	竹田 奈未	
H17.11. 3	IEEE Sensors Council Best Student Paper Award Finalist	大学院工学研究科M2	Wisnu Jatmiko	
H17.11. 9	MHS2005 Best Poster Award	大学院工学研究科D2	元尾 幸平	福田敏男（大学院工学研究科教授）、松野隆幸（大学院工学研究科助手）他1名と連名
H17.11. 9	MHS2005 Best Poster Award	大学院工学研究科D1	中尾 茂樹	安藤妙子（大学院工学研究科助手）、式田光宏（エコトピア科学研究所助教授）、佐藤一雄（大学院工学研究科教授）と連名
H17.11.24	日本放射線安全管理学会 技術賞	アイソトープ総合センター研究生	中里 一久	森 一幸（株式会社イング）、西澤邦秀（アイソトープ総合センター教授）と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 平成17年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰を医学部附属病院の戸田すま子さん、平元千恵子さんが受賞	11.16 (水)	中日 (朝刊) 読売
2 名古屋刑務所で受刑者2人が革手錠で死傷したとされる事件で特別公務員暴行陵虐致死罪などに問われている刑務官5人の公判に武田邦彦・工学研究科教授が出廷 検察側が主張する革手錠のベルト締め付けによる臓器損傷について、「間違っている」と因果関係を明確に否定	11.16 (水)	中日 (夕刊)
3 C型肝炎の治療に使われる抗ウイルス薬「リバビリン」に血友病の出血予防効果があることを輸血部(高松純樹・医学部附属病院教授)と消化器内科(後藤秀実・医学系研究科教授)のグループが発見	11.17 (木)	中日 (朝刊)
4 法学研究科教授会は、佐分晴夫・法学研究科長・法学部長の任期満了による後任に松浦好治・法学研究科教授を選出	11.17 (木)	中日 (朝刊) 他2社
5 本学の卒業生らでつくる「戦後60年の会」が、20日に芥川賞作家の米谷ふみ子さんらを招いて、論議対話集会を開催	11.17 (木) 11.21 (月)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
6 第2回医用原子力技術研究振興財団講演会「原子力(放射線)利用技術の医療への貢献ーそこまで来た次世代がん診断・治療法ー」12月9日に豊田講堂で開催 石垣武男・医学系研究科教授が治療施設「名古屋高度先進医療センター」の建設計画について説明	11.17 (木) 12.10 (土)	読売 中日 (朝刊)
7 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」科学フォーラムが17日に、「科学のフロンティアを拓く」をテーマに開催され、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授、小柴昌俊東京大学名誉教授、リンダ・バック氏の3氏が基調講演を行った	11.18 (金) 11.29 (火)	読売
8 ひと：武岡洋治・本学名誉教授 スーダンの盲学校に支援を続ける牧師	11.18 (金)	朝日 (朝刊)
9 岐阜県が来年度職員互助会への公費投入をやめる提案 公費圧縮へ東海地方も見直しの動き：竹内仁心・経済学研究科教授コメント「公費である以上、上乘せの程度とそれに見合う仕事をしているかの説明が必要」	11.19 (土)	朝日 (夕刊)
10 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 仏像誕生の謎	11.20 (日)	中日 (朝刊)
11 体験実習「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」が、19日に博物館で、日本学術振興会が助成するプログラム「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の一つとして開催され、ノーベル化学賞受賞者の白川英樹博士が見学した	11.20 (日)	中日 (朝刊)
12 訃報：鈴木英一・本学名誉教授	11.20 (日)	中日 (朝刊)
13 ボクシング部のトレーニングジムが同部OBらの支援により東山キャンパス内に完成	11.20 (日)	中日 (朝刊)
14 第25回東海・関西学生ライダー競技会の団体で名古屋大学Aチームが優勝 個人も鈴木章充さん・本学学生が優勝	11.20 (日)	朝日 (朝刊)
15 核心：日本の大学が続々と中国へ進出 本学は11月に初の海外事務所を上海市に開設 開設に合わせ市内で開催したフォーラムには、同市内の名門大学から400人を超す学生が集まる盛況となった	11.21 (月)	中日 (朝刊)
16 本学など全国4会場で8月に開催された「日本数学コンクール」と「日本ジュニア数学コンクール」、「論文賞」の入賞者が決定し、3日に本学で表彰式が行われた	11.21 (月)	中日 (朝刊)
17 第52回中山道東濃駅伝が20日行われ、一般Aで名古屋大学Sチームが優勝 5区の小泉健二さん・本学学生は、「最初から予定通りにたすきをつないでくれた。優勝を狙っていたのでほっとしました」と話す	11.21 (月)	中日 (朝刊)
18 第2回「看護と社会」研究全国集会 26、27日にIB電子情報館で開催	11.21 (月)	中日 (朝刊)
19 挑戦 企業人：本学発ベンチャー企業ファイン・バイオメディカルの池田誠一社長は、脳外科手術を模型で練習できれば医療事故が減らせると脳血管を精密に再現 本物に感触などが近いと医師の評価も高い	11.22 (火)	日経 (朝刊)
20 高等研究院フォーラム2005「アジアの共通理解と総合的支援体制」25日に開催	11.22 (火)	中日 (朝刊)
21 本学相撲部が中心となり、中部地方以西で初の体育推薦で部員を獲得していない大学相撲部対象の大学リーグ戦「東海・近畿大学相撲リーグ戦」が来年3月に開幕	11.22 (火)	中日 (朝刊)
22 学生街ダンス：吉村久美子さん・本学学生 後輩に何か残したいという思いからつくった「就活サプリ」	11.22 (火)	中日 (朝刊)
23 平成17年度名古屋大学鶴舞公開講座「今が旬、メタボリック症候群てなに？」12月10日開催 井口昭久・医学部附属病院長らが一般向けにやさしく話す	11.22 (火) 11.25 (金)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
24 「名古屋大学インターナショナルアドバイザーボード」を設け、2006年2月に初会合を行うことを発表 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授を委員長に、赤崎勇・本学特別教授、ノーベル医学・生理学賞受賞者のイグナロ・UCLA教授、同化学賞受賞者の李遠哲・台湾中央研究院院長ら7人がメンバーとなり、本学の教育・研究について審査、評価してもらう	11.23 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
25 愛・地球博後の街づくりについて話し合う「名古屋の将来を語る懇談会」(座長・松尾稔・本学名誉教授)22日に開催	11.23 (水)	読売
26 桃花台線存廃 15年目の岐路：森川高行・環境学研究科教授は、「計画段階で無理した場合、いずれは破綻する。64億円もの累積赤字を生んだ桃花台線はその象徴ではないか」と指摘	11.24 (木)	中日 (朝刊)
27 アジアからの留学生らがパネリストとして招かれ、それぞれの国の教科事情や日本に対する感情などを話すシンポジウム「アジアの教科書から見た日本」が23日に開催され、廉美蘭さん・本学留学生(韓国)は、「日本人は誤解しているが、韓国は教科書で反日教育はしていない」と話す	11.24 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
28 愛・地球博市民プロジェクトに参加した学生たちのプロジェクト「ユースダイアログ」が上海市の大学生を招いて開催したフォーラムをきっかけに、メンバーの西村文宏さん・本学学生らが、「せっかく知り合ったんだから、一緒に何か続けたい」と考え、「my 箸プロジェクト」を始める 上海万博までに日中で計百万人が自分の箸を持ち歩くようになることが目標	11.25 (金)	中日 (朝刊)
29 国立大学は法人化に伴い、存在感を示そうとPR活動に知恵を絞る 本学では、8月に広報室を新設、9月からは大学生協で赤崎勇・本学特別教授の青色LEDにちなんだLEDグッズを販売 平野真一総長は「大学の研究を紹介するいい商品」と話す	11.25 (金)	朝日 (夕刊)
30 学生や研究者らにフランス留学の魅力を伝える「フランス留学フェア」が25日に開催され、2003年から1年間留学していた佐々木織恵さん・本学学生は、「フランスは個人主義が徹底し、仕事より生活全体の質に価値を置く文化。自分の人生を見つめるきっかけになった」と話す	11.26 (土)	中日 (朝刊)
31 日本で開発され、世界の鶏卵業に一大革命をもたらしたヒヨコの雌雄鑑別法を欧州に広めた69年前の35ミリフィルムが、当時の要覧に映画が製作されたという記載を蛭薙観順・博物館助教授が見つかり、鑑別師養成所に確認を依頼したことで発見された 本学農学部初代学部長で鑑別法を発見した故・増井清博士が登場する貴重な映像	11.27 (日)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
32 本:「三河地震 60年目の真実」木股文昭・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授、林能成・同助手、木村玲欧・同助手共著	11.27 (日)	中日 (朝刊)
33 本:「DNA鑑定 その能力と限界」勝又義直・医学系研究科教授著	11.28 (月)	中日 (朝刊)
34 NPO 法人愛知排泄ケア研究会は、本学排泄情報センターがヘルパーやケアマネジャー向けに2003年に作製した「排泄ケアマニュアル」を手帳サイズにまとめ、「排泄管理手帳」を作製	11.29 (火)	中日 (朝刊)
35 模擬法廷に音声認識を利用した議事録作成支援システムを導入 菅原郁夫・法学研究科教授は、「発言者の言葉と表情と一緒に確認できるので、模擬裁判後でも具体的な指導ができる」と話す	11.29 (火)	日刊工業
36 学生街ダンス:尾関雄一朗さん・本学学生 名古屋市立大学と本学の学生との「社会調査」合同報告会で、新たな視点と刺激を受ける	11.29 (火)	中日 (朝刊)
37 映像インスタレーション・パフォーマンス公演「cycling (サイクリング)」を情報文化学部の主催で12月3、4日に開催 アーティストで名古屋学芸大学メディア造形学部助手・伏木啓・本学非常勤講師は「記憶という言葉がキーワード」と話す	11.29 (火) 12. 2 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
38 研究交流クラブ第96回定例会/長寿科学総合研究事業研究成果発表会「ヒトの老化のメカニズムと健康長寿の方策」12月1日開催 磯部健一・医学系研究科教授の講演など	11.29 (火)	中日 (朝刊)
39 市民団体「不戦兵士・市民の会東海支部」(代表世話人・安川寿之輔・本学名誉教授)の主催で戦争体験を語り継ぐ「第49回不戦のつどい」12月11日開催	11.29 (火) 12.14 (水)	中日 (朝刊)
40 講演会「巨大地震に対する企業・家庭の備え」12月6日開催 講師に福和信夫・環境学研究科教授ら	11.29 (火)	中日 (朝刊)
41 本学学生サークル劇団「新生」第42回独立公演「マシーン日記」12月3日開催	11.29 (火)	中日 (朝刊)
42 第368回中回日懇話会が29日に開催され、平野真一総長が、「教育の現場から一法人化になって」をテーマに講演し、今後の学内運営について、「教育、研究に加え(学術の)社会貢献も重要な使命」と語る	11.30 (水)	中日 (朝刊)
43 愛・地球博会場跡地につくる都市公園内の中心的な施設について検討する「理念継承エリア検討委員会」(委員長・平野真一総長)の初会合が29日に行われ、来園者の情報交流センターの構想や記念オブジェの設置などの提案が出された	11.30 (水)	日経 (朝刊) 他2社
44 シンポジウム「東海地域の中小企業金融の円滑化にむけて」が29日に開催され、家森信善・経済学研究科教授の基調講演などが行われた	11.30 (水)	中日 (朝刊)
45 2006年度の学生募集要項を29日に発表	11.30 (水)	中日 (朝刊)
46 科学技術振興機構は、2005年度に新設した公募型研究開発として、「ユビキタス社会のガバナンス」分野で宮尾克・情報連携基盤センター教授の「バリアフリーのための応答・支援スポットの構築」など3件、「21世紀の科学技術リテラシー」分野で戸田山和久・情報科学研究科教授の「基礎科学に対する市民的パイロネージの形成」など6件を採択	12. 1 (木)	日刊工業
47 備える:災害時の「帰宅困難者」を想定し、約10キロの徒歩帰宅を木村玲欧・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手、林能成・同助手らとともに体験	12. 1 (木)	中日 (朝刊)
48 馬場嘉信・工学研究科教授らは、ナタデココの繊維質などを応用して、遺伝子分析チップの解析精度を従来の6倍に高めることに成功	12. 2 (金)	日経 (朝刊)
49 名古屋市天白区の相生山緑地で3日、市民によるヒメボタルの幼虫の生息調査が始まり、17日に本学で報告会が開催される	12. 2 (金) 12. 4 (日)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
50 叙位叙勲:従四位瑞宝小綬章 浅津安恕・環境学研究科教授	12. 3 (土)	中日 (朝刊) 読売
51 医療の安全に関する研究会第10回記念大会「医療事故調査と被害救済」10日開催 上田裕一・医学系研究科教授らが参加するシンポジウムなど	12. 4 (日) 12.11 (日)	中日 (朝刊)
52 第67回東海学生駅伝競走大会で名古屋大学Aチームが63年ぶり2度目の優勝	12. 5 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
53 名大サロンの主役：塩村耕・文学研究科教授 西鶴が求めたテーマ「変心」にこめられたメッセージ	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
54 理学研究科光・赤外線天文学研究室の若手研究者や学生が、手作りで大型ながら超軽量の天体望遠鏡を開発している 望遠鏡の土台となる「架台」はほぼ完成し、望遠鏡の眼となる「主鏡」を搭載すると国内最大・超軽量の望遠鏡となるが、開発リーダーの栗田光樹夫・理学研究科助手は、「1メートルを超える鏡は海外製ばかり。中部地区のモノづくりの技術を借りた新加工法で直径3メートルの主鏡を完成させたい」と意欲を燃やす	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
55 ときめき時日記：丹羽亜衣さん・本学学生 OLから大学へ、自分の能力への挑戦の連続	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
56 第13回名古屋大学科学研究オープンシンポジウム「アジアとともに研究する～名古屋大学のアジア研究最先端～」9日にシンポジオンホールで開催	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
57 ニッポン人・脈・記 宇宙にあこがれて：池内了・本学名誉教授は、今、理系と文系を「ごった煮」にした「新しい博物学」を目指している	12. 7 (水)	朝日 (夕刊)
58 岡本光正・愛知学院大学非常勤講師と米・デイトン大学の研究グループは、岡本さんが本学理学研究科に在籍中に開発した手法を用いて、イモリの目の組織のうち、失った臓器の再生に関与しない部分に遺伝子操作を加え、水晶体 (レンズ) を再生することに成功	12. 8 (木)	中日 (朝刊) 他2社
59 伊藤秀章・エコトピア科学研究所副所長：リサイクル政策 多角的な監視体制を	12. 8 (木)	中日 (朝刊)
60 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 本の赤い傍線、記憶たどれば…	12. 8 (木)	朝日 (朝刊)
61 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授、江崎玲於奈・茨城県科学技術振興財団理事長、小柴昌俊・東京大学名誉教授の3氏が7日、谷垣禎一財務相を訪ね、2006年度の科学技術振興費の拡充を求める要望書を提出	12. 8 (木)	日刊工業 他3社
62 新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) の研究プロジェクト (リーダー・早川尚夫・本学名誉教授) は産学官連携で二オプ系単一磁束量子 (SFQ) 回路による超電導ネットワークデバイスの開発を進めており、本学はSFQ回路設計の自動化技術の開発に加わっている 半導体LSIでは到達できない未踏の超高速・超低消費電力が可能となり、超高速のルーターなどの実現が期待されている	12. 8 (木)	日刊工業
63 本学と東海4県の41信用金庫で作る東海地区信用金庫協会が産学連携に関する協定を締結 金融機関の広域組織と大学の連携は全国初で、平野眞一総長は、「産学連携で地域経済の活性化につなげたい」と話す	12. 9 (金)	毎日 (朝刊) 他5社
64 東海地方11月の地震：林能成・災害対策室助手	12. 9 (金)	読売
65 17～18世紀は太陽の活動周期が現在より平均で3年長い約14年だったことが、太陽地球環境研究所の宮原ひろ子・日本学術振興会特別研究員らによる杉古木の分析で判明	12. 9 (金)	朝日 (夕刊)
66 「交流人口を増やすまちづくりシンポジウム」が9日に開催され、谷口元・工学研究科教授が基調講演で「イベントやコンベンションなどを開催し、そこに訪れる人々の『交流人口』を増やすことが活性化につながる」と説いた	12.10 (土)	中日 (朝刊)
67 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 悪魔の誘惑	12.11 (金)	中日 (朝刊)
68 「九条の会」愛知・大学人の会の講演と交流の集いが10日に開催され、愛敬浩二・法学研究科教授が県内各大学の教職員の前で、「現代の改憲動向と私たちの課題」と題して講演を行った	12.11 (金)	中日 (朝刊)
69 名古屋外国語大学で行われた通訳コンテストで松下尚子さん・本学学生が優勝	12.11 (金)	中日 (朝刊)
70 三菱東京UFJ銀行の本店は東京 中部財界との距離が遠く懸念：家森信善・経済学研究科教授は、「金融機関は地方であるほど突出した大企業であることが多く、情報収集力や資金・スタッフ面での能力も高いため、地域貢献が期待される。金融機関側も財界活動を通して地域産業を育てないと本業が伸びない事情がある」と全国各地の財界で銀行が大きな役割を果たしてきた背景を語る	12.13 (火)	読売
71 名古屋市が住基コードを住民基本台帳ネットワークから削除しないと決定に市民68人が異議申し立てをしてきた問題で、市個人情報保護審議会 (会長・市橋克哉・法学研究科教授) は12日に「非削除決定は妥当」との答申をまとめた	12.13 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
72 訃報：楯塚昭三・本学名誉教授	12.13 (火)	中日 (朝刊) 他2社
73 学生街ダンス：佐藤恵太さん・本学学生、館清隆さん・本学学生 東海学生刑法学会の第3回討論会で、事件の解決案を討論	12.13 (火)	中日 (朝刊)
74 ときめき時日記：丹羽亜衣さん・本学学生 勉強不足で院試は悲惨な結果に	12.13 (火)	中日 (朝刊)
75 附属図書館友の会トークサロン・ふみよむゆふべ「西鶴の手紙」16日に開催 塩村耕・文学研究科教授が井原西鶴の書簡体小説を読み解く	12.13 (火)	朝日 (朝刊)
76 「国連トークイベント」が13日に開催され、中西久枝・国際開発研究科長と中日新聞社の小出宣昭常務取締役編集担当が、「国際化時代の発想」について語り合った	12.14 (水)	中日 (朝刊)
77 法学研究科で、模擬の民事裁判をもとにした講義が開かれ、13日に模擬法廷で証人尋問などが行われた	12.14 (水)	読売
78 総合大学とアート：茂登山清文・情報科学研究科教授 距離をこえて想像力をはたらかすこと、近づき難さの自覚のなかでなお近づく意志を抱くことが、芸術が大学に教えてくれることではないか	12.14 (水)	朝日 (夕刊)
79 教育学部附属中学校の生徒が14日にマレーシアの学生と交流し、互いの言葉や文化を理解し合った	12.15 (金)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月20日(金)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

第16回名古屋大学防災アカデミー

講 師：島崎邦彦 東京大学地震研究所教授
演 題：地震惚け日本人—長期評価の十年—



1月21日(土)

場 所：医学部
時 間：9時30分～16時
参 加 費：無料
募集対象：高校生30～40名
(保護者参加可能)

[問い合わせ先]

研究協力・国際部社会連携課
052-789-2040

ひらめき☆ときめき サイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

講 演 者：各務秀明 医学部助教授
演 題：体の一部を再生させる新しい医療

1月24日(火)

場 所：学士会館
時 間：14時30分～20時

[問い合わせ先]

研究協力・国際部社会連携課
052-789-5545

東京フォーラム2006

プログラム
・ブース展示 (14時30分～20時)
・講演会 (16時～)
郷 通子お茶の水女子大学学長
丹羽宇一郎伊藤忠商事株式会社取締役会長
・産学連携交流会 (17時20分～19時)
*15時30分より全学同窓会関東支部総会を開催



1月25日(水)

場 所：博物館展示室
時 間：12時15分～13時30分
入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第14回名古屋大学博物館コンサート (NUMco)

演 奏 者：涂善祥
演奏題目：中国琵琶の世界

1月25日(水)～2月26日(日)

場 所：博物館展示室
時 間：10時～16時
休 館 日：月・火曜日
入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第8回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：版画に込められた民衆のねがい～中国伝統年画



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月28日(火)

場 所：高等総合研究館カンファレンス
ホール
時 間：17時～

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

第12回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：笹井理生情報科学研究科教授（高等研究院教員）
「分子ゆらぎのつくる生命プロセス」

講演者Ⅱ：後藤節子医学部保健学科教授（高等研究院教員）
「妊娠期・産褥期の気分障害（うつ病）に対する文理複合的研究」

名大トピックス No.152 平成18年1月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL. 052-789-2016 **FAX.** 052-788-6272 **E-mail** kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

冬休みの豊田講堂
(平成17年12月20日撮影)



45 名大グラウンド小史

東山キャンパスの東南端にある総合運動場地区（通称「山の上」）は、多くの学生がクラブ活動や全学教育科目のスポーツ実習などで利用する施設です。

歩くところとした時間のかかる、この山の上地区が整備されたのは、今から45年近く前の1961（昭和36）年のことですが、それまでの東山キャンパスの運動場は、現在の工学部4号館と5号館のあたりにありました。この場所に運動場を設置するという構想は、すでに名古屋帝国大学創立当時からあり、実際に創立後すぐにここが運動場となりました。

敗戦後も、東山キャンパスにこれ以外の本格的な運動場が増設されることはありませんでした。ただ教養部では、旧制八高から引き継いだ瑞穂キャンパスの運動場が使えました。また、桜山キャンパス（経済学部）には旧名高商運動場が、旧陸軍歩兵第6連隊兵舎跡の名城キャンパス（本部、文系学部）、愛知学芸大学安城分校の敷地を転用した

安城キャンパス（農学部）にも運動場がありました。八事にも借地のグラウンドがあったようです。

しかし、1950年代末から60年代にかけて、東山キャンパスに本部、文系学部、農学部、教養部などが続々と集結します。そうなる東山にも本格的な運動場施設が必要となりますし、立地条件のよい旧グラウンドの敷地に学部校舎の増設を求める案も出てきました。そこで、少し前に追加取得された山の上敷地に、陸上競技場や野球場が設置されたのでした。まだこの地域の開発が進んでいなかった当時、夕方になると新グラウンドから東山動物園のライオンの吼える声が聞こえたといえます。

本誌前々号でも紹介されたように、このたび山の上の陸上競技場のフィールドに、最新の人工芝が導入されました。雨天時の使用やケガの軽減、人工芝が人体に及ぼす影響の研究など、さまざまな効用や成果が期待されています。



1	4
2	3

- 1 現在の豊田講堂方面から見た、1942年当時の東山キャンパス運動場
- 2 1943年の開学式に配布された、名帝大の建設構想を絵画化した絵はがき。右下に陸上トラックが描かれている
- 3 山の上地区が整備された当時の東山キャンパスの航空写真（赤で囲った部分が旧グラウンド）
- 4 フィールドを人工芝化した山の上陸上競技場